
隻腕少年の異世界の冒険

焼き芋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隻腕少年の異世界の冒険

【Nコード】

N3713V

【作者名】

焼き芋

【あらすじ】

俺は左腕と大切なものを失った。

俺は絶望に体を支配され、よくわからないうちに自殺をはかる。

だが、気づいたときには違う場所において、俺を家に住まわしてくれた人にはしごかれて・・・。「一年だ」…はい？「一年でお前を一人で生きて行けるまで鍛えてやる」

そんな宣言は俺の辛い日々の始まりだ。

隻腕の少年はこれから異世界をどう歩いてゆくのか。

1話 失ったモノ

ある日、俺は絶望のどん底に落ちる事になった。

その日は、俺と父と母、そして妹の四人で車に乗って遠くに出かけていたんだ。

とても楽しく車の中で笑いながら話していた。

その楽しさは、一瞬で消える事になる。

それは、あるテーマパークに行った後の帰り道だった。

テーマパークでの事を思い出し、どんな所が面白かったかなどを笑いながら四人で話している。

2

「あのジャットコースター凄かったね〜。とつても怖かったよ〜」
そんな事を言っているのは二歳年下の妹。

「私はあのレストランの料理が一番記憶に残ってるわ」
完全に食いしん坊と間違われそうなことを言ってるのは母。

「俺は、あの走り回っていたツインテールの小さな女の子が・・・
いてっ」

眼鏡をかけている父は変態まがりの冗談を言った瞬間に母に軽く叩かれていた。

軽く叩かれているだけで運転にも支障はないほどだった。

まあ、そんな感じで父は車を運転していた。やはり運転しているので少しばかり控えめだったが、とても楽しそうだった。

そして、それは高速道路で横を通っていた大型のトラックによって潰された。

そう、俺達はトラックに車ごと潰されたのだ。

トラックの運転手は何時間もの運転により、疲れ果て居眠り運転をしてしまったのだ。

父がそのトラックを追い抜かすために脇の車線を通り、スピードを上げた。

俺はとても眠くて窓に手を突きながらボーっとしていた。

それは偶然にも大型トラックの運転手を見ることになった。

運転手は俺から見てもわかるとおり、コックリコックリと首が上下し、午後の授業中の居眠り状態の俺と同じ状態になっていた。

俺は眠くて頭がほとんど動いていない状態で見ただので、その時点ではなにがなんだかよくわからなかった。

そして、運転手は俺の目の前で寝ぼけてハンドルを横にきつただ。

「・・・えッ!？」

思わずそんな言葉を漏らした。

それに俺以外の三人は反応する事はできなかった。

反応する前に大型トラックが俺達乗っている車におもいつきり突

っ込んできたのだ。

俺達の乗っている車はグシャグシャにひしゃげ、中にいる俺達をそのまま潰す。

そこで俺の意識は一瞬だけブラックアウトする。

次に目覚めたのはぐしゃぐしゃにひしゃげた車の中だった。

「・・・ッ」

頭にズキリと痛みがあり、ついしかめっ面になってしまう。

最初に考えたことはここがどこだかわからない、というものだった。

どうにかさつきまでの事を思い出す。

そして車の中に鉄の臭いが充満してる事に気づく。

慌てて辺りを見回すと俺以外の家族の顔が見えない。

「・・・え？」

他のみんなが車から脱出したというわけではなかった。

俺の周りには車の金属で全体が見えるわけではないが、一部からは血にぬれた手が見えていたり、まるでドラマやアニメのようにレンズの割れた眼鏡が落ちていたり、または血で所々が真っ赤になっ

目が覚めたのは病院の一室だった。

「ゆっくりと起き上がる。」

それを見た周りの看護婦さんが駆け寄ってきて、俺に何かの質問をして確認をとってくる。

だが、俺は黙ったままボーっとしていて看護婦さんの質問に返答をすることはしない。

左腕を確認してみれば肩からすべてがなくなっていた。

左肩の方は包帯が巻かれ、一部だけミイラのような状態になっている。

あの状態を思い出してみればこれもしょうがないのかもしれない。

そこであることが気になった。

「・・・俺の、家族は？」

俺のかすれ気味の声。

その言葉に看護婦さんは黙りこくる。

それを見れば、最悪な状態を思い浮かべるのは自然の事だった。

「・・・そんな」

再び絶望が俺の体を満たす。

そこで、俺の目の前は色を失ったようにモノクロになり、何も考ええる事ができなくなった。

それから数日たった。

俺はよれよれのパジャマ着て、深夜10時程度の時間に病院の外を歩いていた。

当然左腕はなく、左腕のほうのよれよれのパジャマは風で揺れていた。

その眼には光はなく、前を向いてるようで向いてはいない。

もし、この状態を誰かが見ていたら絶対に可笑しく思うのは当然だろうが、この時間を歩いているものは少なく、俺のことを気にしてもみんなが無視して横を素通りしていく。

そんな状態で俺は歩いていく。

目的なんてない、行く場所なんてどこにもない。

俺を引き取ってくれる親戚がいたそうだが、今の俺にとって何にも関係はない。

ただ歩く。

そして目の前には踏切があり、踏み切りのランプは赤く点灯したり消えたりして、甲高い音が聞こえる。

電車がもう少しで来るのだろう。

だが、そのときの俺はそんな事を気にすることは無かった。

通せんぼをしている踏切の棒を無視して乗り越える。

そして線路上で立ち止まる。

俺を凄い量の光が照らす。横を見れば迫ってくる鉄の塊。

警告のためか大きな音がそれから聞こえて、慌ててブレーキをかけているみたいで線路から火花が散っていた。
それでも止まることはできない。

だが、それを見ているのにもかかわらず俺は動かない。

そして電車は俺に迫り、ぶつかった。

だが、電車になにかがぶつかった音は聞こえなかった。

電車にぶつかり、体がバラバラになりして線路上にゴロゴロと転がる・・・と、そんな事もなければ血一滴ですら落ちていなかった。

ある世界、ある場所で隻腕の少年が一人・・・・・・・・消えた

1話 失ったモノ（後書き）

すこし鬱な感じですが、基本的に明るい小説を目指しています。
次は異世界です。

2話 湖の森

ある世界の夜の森。

とても不気味な雰囲気漂っている紫色の森。

凶悪な魔物などが住んでいてめったに人を寄せ付けない森。

その森の中には不思議なことがおきるといふ湖があった。

その湖では人々が考えないような事がおきる。

ある一説では死人を蘇らせる事ができ、ある一説では神様をも殺せる力がある。

そんな不思議な力を持った湖。

その湖のほとり。

そこには体の下半分が水に浸かっている黒髪黒目、そして左腕の無くなった隻腕の少年が眠っていた。

その少年は眠り続けている。

そこに軽い足音が響いた。

現れたのは白色の髪で腰辺りまでのばしているロングヘアの女性だった。

「あら？ ここに人間がいるなんて珍しいわね」

女性は静かに少年へと近づいていく。

そして、物珍しそうに少年を眺めている。

「この世界では珍しい黒髪黒目ね……。そして隻腕か」
女性は少年が寝ているのにもかかわらずまぶたを持ち上げたり、ほっぺをつついたりして観察している。

それに対して少年は寝ているが「うっっ、うっっ」と唸り声を上げているだけだった。

「それにしてもこの湖が人間を入れるなんてありえないんだけどな」。……この子には少し興味をもてるわね。他の人間と比べるといくらかマシそうだし、私の暇潰しになりそうだしね」

女性はニヤリと笑いながら少年の頬をつついていてる。

そこで一瞬だけ女性はしかめっ面になった。

「この湖に来る前に何があったかはよくわからないけど、絶望が体を支配しすぎてて、これじゃあ私の暇つぶしにはならないわね……」。

うん、この絶望は私がもらっちゃいましょうか。少しだけ辛いだろうけど我慢してもらわなきゃね」

女性は少年のおでこ辺りに触れているだけなのだが、少年が苦しみだした。

「……ぐっ、ああ」

少年の口からは苦しみの声が漏れ、額から大粒の汗が湧き出る。一本だけの右腕は自分の着ているよれよれのパジャマを破れそうなほど強く握り締め、必死に痛みに耐えているようだった。

そして、それは30秒ほどたった時に、女性は少年の額から手を離す。

それと同時に少年はさっきの痛みに耐えているしかめっ面ではなく寝息を定期的にたてる穏やかな表情に戻った。

「さてさて、作業も終わったし。あとはこの子をどうするかね。」

ううん、確か森の近くに物好きな男が一人だけ住んでた気がするわね。あいつに預けてみる事にするかーっ！！

あいつだったならそれなりに私好みに育ててくれるかもしれないしね

女性は、「よいしょっ」というお年寄り臭い声をあげながら少年を片手で持ち上げる。

「ん、せいぜい私を退屈させないように育ててね」

そんなことを言うと同時に少年を抱えた女性は湖のほとりから消えた。

そして場所が変わり、森の近くに一軒だけ家が建っていた。そこには一人の男性が住んでいた。

「ぶはっつ、今日も酒はうめえな」

そんな声を出しているのは肩まである赤髪を後ろで一つに縛って

る30代前半の男。

右目のまぶたは閉じていて、その閉じている右目には一筋の傷跡がある。

その男は酒瓶を傾け、口にアルコールの混ざった液体がトボトボと流れ込んでいく。

すると家の扉がノックされた。

「んあつ？ こんな時間に誰だよおお？」

男は、ほろ酔い気分を味わってる最中に邪魔が入ったことに少し不機嫌になりながらも、酒瓶を持ったままよたよたと扉に向かう。

その間にも相手はイラついたように何回もノックされていてとてもうるさい。

「はいはい、わかりましたよ、開けますよ。……どなたですかあ？」

そして、外に押すタイプの扉を開けた。

「……あぐつ」

開けた瞬間に下から短い悲鳴が聞こえた。

それに対して男は、はてなマークを頭上に浮かべたような表情をしながら下を向くと、黒髪黒目の少年が転がっていて、その額に扉が激突していた。

「ん？ どうやってここに来たんだ……？」

男は目を細めて少年を見た後、森のほうを見た。

すると、森の木の影の間では白くて長い髪がサラサラと舞った後に完全に消えていく。

「……ありやあ、『湖の森』に住む魔女か？」

男はそれを見たせいで完全に酔いが醒める。

「うっつ、さむっ」

扉をあけていたので外から内へと流れ込んでくる冷気にブルブルと震えた後に、とりあえずは少年の首根っこをつかんで家んも中に引きずって入れていく。

「でえいつ!!」

そして、男は変な声をあげながら少年を乱暴にベッドの上にほん投げた後に、扉を閉める。

少年は「むぎゃあッ!!」という変な声をあげるが、ベッドの上でまだ眠っている。

普通に眠ってるだけなのか少年はベッドの上にあった毛布をつかむとグルグルと回り、さっき扉を開けたときに入ってきて、家の中を充滿している冷氣から自分ひとりだけ身を守る。

少年の顔は毛布を包まった事でホカホカがあったかさを味わい自然に気持ちよさそうな顔になっていた。

「こいつ、誰だ？」

男はただ疑問の顔をするのだが、次の瞬間には「どわっしょ
おいつ！！」という意味のわからない大声を上げて毛布にくるまっ
た少年からこの家に一枚しかない毛布を剥ぎ取りにかかった。

2話 湖の森（後書き）

誤字・脱字があれば御報告ください

3話 トオル

俺は目が覚めた。

目が覚めて最初に見たのは見慣れない天井だった。

「……どこ、どこだ？」

起き上がりながら周りを見回すと、完全にわからない場所だった。電車にはねられる寸前までは覚えている。

家族が全員死んだ、というのを聞いた瞬間に何も考えられなくなり視界が白と黒の世界……つまりモノクロテレビを見てる状態になった。

それからただボーっとしたまま病院を歩いたりして、看護婦さんに手を引つ張られ自分の病室に戻り、寝て、また歩き回り、という一日が続いた。

そんな日が続くと同時に家族がいなくなったというものが、完全に理解できた。

親戚の人が引き取ってくれる、ということを見護婦さんから聞いた気がしたが、あの状態の俺にとってそんなことは耳には言っていなかった。

数日がたち、踏切に足を踏み入れた。

そして、今のよくわからない状態である。

俺のいる場所は木製の家の中だと思われる。

それもとて単純な造りで、中央の広い部屋に三つか四つぐらいの小部屋が回りに造られている感じだ。

家の中には、俺の知らないような家具からなんか教科書で見たときのあるような古い家具まであり、ある場所ではまるで映画にでも

出てきそうな鞘に収まった剣が立てかけてあった。

「ん、やっと起きたのか。お前」

そんな声が聞こえて、そちらを見てみると一人の男性がいた。

日本ではアニメでしか見たときのないような赤髪。

それは肩ぐらいまでの長さなのだろう、後ろで一つに縛られていた。

そして右目は開いておらず、まぶたの上から縦一筋に傷跡がある。

「んん、紅茶飲むか？」

赤髪の男はそんな事を尋ねてきて俺はこくりと頷いた。

すると紅茶の入ったコップを渡され、俺はそれをちびちびと飲み始める。

正直、まだ熱い。

よく他の人は、すぐに飲み始められるよな。

「んで、お前どこから来た？」

赤髪の男がそう聞いてきた。

「・・・」

誰だかわからない人と話すなって親に言われました。

いや、正直そんな事を守ってる雰囲気じゃないけどね。

「お前、人のベットを占領してたくせにここでだんまりってのはないだろ・・・」

「あ、すみません」

俺はベツトから下りる。

そして改めて服を見てみるとよれよれのパジャマではなくなっていた。

「お前の着ていた服は濡れてビショビショだったから着替えさせたからな」

赤髪の男が言った。

ほうほう、どおりで違う服なわけだ。

「んで、お前はどこから来たんだ？」

「日本です」

「日本・・・？」

そこで赤髪の男は怪訝な顔になった。

なんか俺可笑しいこと言った？

そして赤髪の男は少し何かを考えていて、何かに気づいた顔になると口を開く。

「ふむ、君は異世界に来た様だ」

「い、異世界っ!?!?!?」

ハハハ…何を言い出すんだか、どうせこれは俺をビックリさせて正気に戻すためのドッキリというやつだろっ?

外を確認してみればすぐにわかるさ…っ!!
慌ててスタスタと走って右手で扉を引く。

…っ!! うん、引くんじゃなかった様だ…この扉は外に押す式みたいだ。

とりあえず扉を押して外を見る。

「んなあっ!?!?」

目の前は紫色の森だった…まあ、家から十メートル程度離れているのだが…。

こんな森はテレビでのアニメでしか見たときが無い。

扉から外を出て周りを見回す。

俺がいた病院は俺の家の近所でもあったから付近の様子はわかるはずだが、こんな森は見たときは無い。

「あんまり外に出て騒ぐな、魔物が寄って来て面倒な事になる」

そんな赤髪の男の言葉。

それと同時に森のほうでガサゴソという茂みを書き分ける音が聞こえてきた。

そちらを見ると黒い犬が8匹程度出てきた。

グルルルルッ…ガアッ!!

そんな犬達のうめき声が聞こえ、一斉に襲い掛かってくる。

「うわあああつ!?!」

それに驚き、尻餅をつく俺。

目の前には人の肉なんてズタズタにできるであろう牙がズラリと並んだ大きな口と鋭い爪が迫ってくる。

そして、その犬は目の前で赤い刃によって真つ二つに切り裂かれた。

「だから言つただろ。騒ぐなつてよお・・・」

俺の後ろには赤髪の男が立っていて、その手には血にぬれた赤い刃の剣が握られている。

家の中に立てかけてあつたものだ。

一回剣を振つただけで真つ二つに切り裂かれたのは3匹。

残りの5匹は赤髪を睨んである一定の距離をとりながら、俺達の周りを回っている。

「・・・つたく、めんどうだ。『ファイア火』」

赤髪がよくわからない言葉を言つと同時にその手から炎が噴出し3匹の黒い犬を焼き尽くした。

それを見た黒い犬はさすがに勝てないと理解したのかそそくさと逃げていく。

「まったく、ヘルバウンドなんて雑魚に何を驚いてるんだか・・・赤髪は俺の首根っこを掴んで持ち上げて、立たせる。」

俺は赤髪に「入ってる」と言われたので正直に従う事にした。

な、なんだ…あの犬。

いくらなんでもいきなり襲ってくるって何?

「お前、場所を考えろ！　ここは『湖の森』のちかくなんだk・・・
ああ、こいつは異世界から来たんだったな・・・」
扉を開けて入ってきた赤髪は頭をかきながらやれやれといった感
じの表情でいる。

「な、なんで俺が異世界から来たってわかるの？　自分でもわから
ない状態なのに・・・」

俺が理解できない状態なのに、何故にこの赤髪の方は理解してる
状態なのっ!？

「俺は昔、この森がある国・・・まあ『アリミア』というんだが、
その国の王都の城に仕えていたときがある。

その時に俺は、この世界ではあまりいないお前と同様の黒髪黒目
の少年と話したときがあるんだ。こいつはこの世界では一般的に勇
者と呼ばれていた。・・・異世界から召喚された勇者ってな。

そいつに日本という話も聞いた時がある。
だから俺はお前が異世界から来た訪問者っていうことがわかった、
っただけだ。簡単だろ？」

「え？勇者？異世界から召喚？そんな小説みたいな・・・

いや、でもヘルバウンドって聞いたときあるし・・・え、でも・・・
」

正直な所、まだ頭が追いついていきません。

でも、考えてみるとさっきの手から出た火って魔法なんじゃ？

ん、むむむむ・・・

「まあ、すぐに理解しようとしなくて良いんじゃないか？ ゆっくりとこの世界に対応すればいいだろ」
混乱している俺を見て赤髪は面白そうに笑いながらそんなことを言った。

「もし、ここが俺の知ってる世界じゃないとして俺って生きていくんですか？」

まあ、楽に生活するためにはここにずっと居座って・・・グへへ。
べ、別に悪い笑みなんて浮かべてないんだからねっ！！！！・・・
グフフ。

「あ、ここにずっと居座られるのは嫌だからな」

「んなあつ！！？」

「俺は静かな生活をしていたいんだよ。お前に壊されてたまるか・・・」

「じゃ、じゃあつ！！ 俺はどうすれば良いんですかっ！！？」

「……うん、一年だ」

赤髪は指を一本だけ上に立ててそんなことを言った。

……一年？

「一年で、この世界を一人孤独で生きていけるようにしてやるよ」
笑顔でそんなことを言う赤髪。

その自信はどこからっ！！？あと、孤独って言うなっ！！いろいろと怖くなるわっ！

「お、そうだ。お前の名前はなんだ？」

「えっと……木島きじま 徹とほろです」

「ふむ、確かファミリネームがキジマの方だったかな……じゃあトオル。」

俺はガイだ、これから一年でお前をバシバシ鍛えてやるよ」
赤髪……つまりはガイさんは満面の笑顔でそう言った。

なんか嫌な予感しかない。

4話 魔法の先生は魔女

「・・・はっ・・・はっ・・・なん、で・・・森の、中、なん・・・
て走らなきゃ・・・いけないの〜!？」

只今絶賛息切れ中。

今は次の日で、ガイさんから聞いた名前だと確か『湖の森』だった
たけかな？

その森の中を今は走っている。

森の中なので足場もきちんとしておらず、とても疲れる。

「お前あれだぞ。森の中を息切れせずに十分走れるようになったら
他の地形でも十分やっていけるんだぞ。知らないのか？」

知るか、そんなもの!!

ちなみに、ガイさんは拳を腰にぶら下げて俺の横を息切れせずに
走っている。

もう既に4キロぐらいは走ってるだろうか。

おれが休もうとした瞬間に叩かれるので、休むことができずに走
り続けている。

「ちなみに、後2キロ程度走ったら錘を腰につけるから覚悟してお
くように」

「いやああああああああああああああつ!?!」
その瞬間に俺の悲鳴が森に響いた。

「おまつ！？ 魔物が寄ってくるから騒ぐなつてっ！！」
ちなみに魔物というのは人間を襲う知性の無い獣である。
魔物の上には魔獣というものがあり、魔獣は知性があり相当強い
固体も多い。

あえて言えばドラゴンのようなものは魔獣だ。

「いづっ！！」

ガイさんの拳が俺の頭に振り下ろされ、激痛が俺を襲う。

うう・・・ひどい、いくらなんでも殴らなくても・・・。

俺が頭を抑えて立ち止まるうとすると再び拳が振り下ろされ嫌々
走らされる。

なんだ、この人は悪魔かっ！！？

そして15分程度走り、さすがに走れなくなりダウンした俺。

結構体力には自信あったんだけど、さすがに森の中は無理。

それに、片腕が無いから走ってるときに少しだけ違和感があるの
で集中できないのだ。

「はぁ・・・お前は少しばかり休んでろ」

額に汗一つ流していないガイさんは俺にそういうと森の中に入っ
ていく。

「え？ どこ行くんですか、ガイさん？」

「ちょっと気になることがある。俺が帰ってきたらまた走るからな」
ええ〜っ!! という俺のブーイングを無視して何も答えずにガ
イさんは中に入っていった。

・・・むう、何もやることが無い。

それにしてもこんなくらい霧囲気の森なんてあまり見なかったか
らな、めっちゃ怖い雰囲気だ。うん、なんか幽霊が出そうで怖いぞ・
。。。

「ん〜・・・やる事があ、ないい〜・・・」

倒れている太い木に座り足をブラブラとしながら、そんな呟きを
する。

すると後ろで茂みをかきわける音が聞こえた。

「んむう〜、ガイさん早かったです・・・ねっ!？」

俺が後ろを振り返ってみてみるとそこには二頭のでっかくて赤い
熊がいた

「・・・・・・・・俺、死亡ですか？」

ガイは森の中を奥深くと歩いていく。

森の魔物たちは、ガイを睨んでいるが動かない。

いや、動けない状態だと言える。

今のガイは徹と普段生活しているときとは確実に違う。

その違いは姿ではない…普段とは違い、まるでプレッシャーのよ
うなものが回りの魔物を襲い、知性の無い魔物ですらも恐怖を覚え
させる。

そして、ガイはある湖の前にたどりつく。

「此処か・・・」

ガイは鞘に納まったままの剣を抜く。

まるで血のように赤い刃、それは少し細みがありながらも感嘆に
は壊れないような錯覚をさせる。

ガイは次の瞬間にその剣をなにもいない空間につきつけた。

「そこにいるんだろ？ 魔女」

ガイがそれを言うと同時に剣をつきつけたところの霧が晴れるよ
うな変化があり、白髪ロングヘアの魔女が現れる。

剣は魔女の喉元につきつけられている状態だった。

「あらあら、私をナンパしにでもきたの？」

「……………お前みたいなのババアなんざ、俺は相手にしねえ」

「よく言うわね。あなたが10年以上前に初めて森にきた時に……すみませんが、道を教えてくれませんか？」ってナンパしてきたくせにね」

「あれは本気で道に迷っただけなんだが……」
魔女は笑い、ガイは眉間にしわを寄せている。

「嘘言いなさいな。私をあなたの家に連れ込もうと……」

「その時、俺はあそこに家を建ててすらないぞ」

「まあ、冗談だったのに……剣をつかんでいる手にさらに力を入れないで欲しいわ。」

「……それとも、あなた如きで私を殺せるとでも？」

最後の言葉だけが、他の言葉と違い威圧感が含まれていた。

そして、いつの間にか、ガイと魔女の周りにはガイを標的にしているいくつもの鋭い岩のトゲが浮いていた。

「さあな……俺の剣が早いか、お前の魔法が早いか、どっちかだろ？」

「……まあ、俺は負ける事なんて考えても無いけどな」

ガイは表情も変えずに鋭く魔女を睨む。

それに魔女はニコリと笑って「冗談よ」と言う。

それと同時に魔法が消え、ガイも剣を鞘に納める。

「それで、真面目な話になるけど何の用かしら？」

「最初から真面目になってほしいもんだ……。
……どうせ、わかってるんだろう？ 俺が此処に来た理由は」

「ええ、あの子の事でしょう」

「あいつは異世界から来たって事で間違いないな？」

「さあ、私はそんな事知らないわよ。湖のほとりで寝てるところを見つけたんだもの」

「湖が……？」

「ええ、とつても興味をそられる子だわ。

湖の恩恵かなんだかはわからないけど、普通の人より数倍の成長能力と魔女も顔負けの魔力を持っているわ」

「は……？」

魔女の言葉にガイが意味のわからないという顔になる。

「あの子は良い子に育つと思うわよ。
だから、頑張って剣術と魔法を教えてあげてね」
それを気にせず魔女はニコリと笑ってそんなことを言った。

「はア？ 魔法に関しては魔女のお前のほうが良いだろ。正直めんどくさいんだが・・・」

勢いで育てるといったが魔法までとは・・・と思っただのか、ガイはとつてもめんどくさそうな顔をしている。

「ええ〜っ！！ 魔女は、この世の中の人間に干渉しちゃダメなのよ。」

本当はあなたの所に連れて行ったのだからダメなんだからね〜」

「お前・・・（俺と同じで）めんどくさいだけだろ。」

あと、あいつは異世界から来たんだ。大丈夫だ、この世（界）の人間じゃねえ」

「いやいやいや、でも・・・」

そんな感じでガイが魔女に面倒な事を押し付けようとしていると・・・。

『ガイさあゝあん！！ 助けてええゝゝゝゝ、俺、死んじやうゝゝ！！』

ガイがそちらを見ると、二頭の赤い熊・・・レッドベアーに追われている徹がいた。

ガイの方を見ると徹は何も考えず、一直線に走ってくる。

「はあ・・・なんでお前はそう魔物に襲われやすいんだっ！！！」
ガイは溜息をつきながら剣を抜き、徹のほうに走っていく。

「そんな熊たちに私の暇つぶしを壊されたくないわね・・・」
そんな言葉が聞こえたがガイは気にせず走り。

ガイは熊の頭の高さまでジャンプして、剣を横に振り熊の首を切り落とす。

それと同時にもう片方の熊は地面から壁が二つ飛び出しグチャグチャに押し潰した。

それは魔法の放った魔法だった。

「お前、この森じゃあ、一気に二匹に襲われるとかあんま無いぞ・・・」
ガイさんが呆れた表情でそんなことを言っている。
それに対して徹は涙目だ。

「それって俺のせいじゃないですからっ!!」

「・・・湖のせいで生命力のようなものが強いから、自然に魔物たちが寄って来ちゃうんじゃないかしら？」

魔女がゆっくりとガイと徹の近くに来て、そう言った。

「誰ですか？ この人」

「ん、お前に魔法を教える先生だ」

「えっ？ 私そんなこと・・・」

「へえ、この綺麗な人が俺に魔法っていう奴を教えるんですか」

「・・・？ 綺麗”ね。うん、まかせて！ 私がピシバシ教えてあげるっ!!」

とつても張り切っている魔女とその様子を見てすこし疑問の顔の徹。

そして、呆れ顔のガイがその森には居た。

5話 魔法

あの熊に襲われてから二日たった。

「大事なのはイメージよ」

「ん〜・・・イメージですか？」

湖のほとり。

そこで俺と魔女さんが話をしていた。

魔女さんに名前を聞いたんだけどただ微笑むだけで教えてくれなかった。

名前は魔女にとって重要なものらしい。

だから、まるで異名のように勝手に名前がつけられるときがある
そうだ。

「そう、イメージよ。

世の中の人間は火の魔法を放つときは火のイメージってね。

あと世の中には呪文ていうのがあって、その呪文で威力が違うわ」

「ふむふむ」

メモメモ。

更に魔女さんに説明を求めると、魔力にイメージを与えることで
形を作るのだ。

呪文はたとえで言う水を噴出すホースのようで、威力が高い呪文
はホースだと太いやつで、威力が小さい呪文だとホースは細いやつ
って言う事だ。

そして、イメージで形を得た魔力はホースから噴出される水というわけだ。

高位の呪文の場合、魔力が少なすぎると発動しないと言う事だ。うん・・・たとえば下手だ。正直へこむわ。

「世の中には下位に火、水、土、風、雷、氷、中位に光と闇、上位に創造と時空っていう属性があるわ。

魔法を使うのが専門の私達魔女でも上位の属性を使えるのは片手で数えるほどしか居ないわ」

「へえ、ちなみに魔女さんは？」

「私を誰だと思ってるの？ 私なのよ。まあ、名前言ってないけど・・・。

私はその片手で数える数の中に入るわね。じゃないと、この森で昔あつた争いで負けてたわ」

争い？ なんで争ったんだろう？

そんな俺の疑問を見抜いたのか、魔女さんが口を開いた。

「こういう神秘的な湖があつたりする不思議な場所はいくつかあるんだけど、そこは必ずと言っても人間はあまりこれない場所なの。

だから人間の居ない静かな場所に行きたいのだったらこういうところがいいんだけど、当然ここを狙う魔女は多いわけ、だから魔女同士で争うときがあるのよ、お互い死なない程度にね」

へえ、いろいろと大変そうだな。

そこを勝ち取ってるこの魔女さんは相当強いつて訳か。

「まあ、話を戻すけど魔法はこんな感じ。中には魔法陣やルーン文字とかで少ない魔力で大きな魔法を発動させる事もできるけど、それには少しばかり準備が必要だから儀式のためであって戦うのには向かないわね。」

まあ、魔力で魔法陣やルーン文字やらを再現して攻撃をしたりする方法もあるけど、今はとりあえずは魔法を先に習得しないとね。そんなことを言う魔女さん。

ふむふむ、とりあえずは魔法って言う所か……。

「じゃあ、試しに見せるわね……『火』^{ファイア}」

そう魔女が言うとかざされた手の平の上に野球ボールサイズの火がポオツ…という音をたてて現れた。

すると魔女さんに「やってみて」と言われた。

「ファイア……?」

俺が魔女さんと同じようにやってみても何の変化も無い。

「ああ、ちゃんとイメージしないとダメ。あと魔力の操作もできてないわね。」

じゃあ、手を貸して」

そういうと俺の手を握ってくる魔女さん。

「……うっっ」

一応こんな綺麗な人に手を握られてしまうとドキドキしてしまう

わけです。

「ふふふ・・・じゃあ、魔力を少しだけ流すからそれで感覚を掴んでね」

そう良いながら魔女さんは微笑むと、なにやら手から変な物が入ってくる気がして変な感覚がある。

なんだかむず痒いっっ！！

そして、魔女さんに「やってみて」と言われた。

えっと、イメージと魔力だよな。

大丈夫だよな。俺ならできるはずだもんっ！！　そうさ、俺ならできるっ！！（俺流自己暗示）

さっきのむず痒い何かを操れば良いはずさあ・・・。
俺うるさいな、とりあえず黙ろっ・・・。

「っつと・・・『^{ファイア}火』」

一応火が出た。けども卓球ボールサイズのものだ。

「やっぱりあれだけじゃ、魔力のコントロールは完璧にはならないわね。」

じゃあ、これを貴方に渡しておこうかしら」

魔女さんはそう言いながら石を渡してきた。

「なんですか、これ？」

石をいろいろな所から見てみるが、何も変哲も泣いただの石だと

思っわけだ。

「それは魔力石。高濃度の魔力が溜まってできた石よ。

この石に魔力を通すと光るからね。ある一定以上の量の魔力を入れるとはじけちゃうから弾けるまで頑張って魔力を入れて」

…はじけさせればいいのか。

「わかりました。がんばります」

石をポケットの中に入れる。

「じゃあ、今日はここまでね。また四日後にいらっしやい」

そついうと俺に手を振る魔女さん。

ふむ、いろいろとためになったな。

というところで、今日の魔女さんとの授業は終わった。

6話 家事

魔女さんの授業から二日たっている。

魔法石のほうは白く光ることはあっても弾け飛ぶことはない。

ガイさんに聞いたら流しいれる魔力が少ないらしい。

結構がんばってるんだけどな……。

そして今は……。

「せえいつ!!」

え〜っと、名前何だっけかな？ あの小型の斧みたいなの……

マサカリだっけ？ まあ、いいや。めんどくさいから気にしません。

片腕で小型の斧を振り上げておもしろい斧に叩きつける。

薪に最初の一撃をくらわすと、薪が斧にひっついて更に重くなる、それをまた打ち付けて割るのだ。

「うん……割れない」

まあ、今やっているのは薪割りをしているのだが、片手で振ってもなかなか割れない。

というか威力は斧の重さ任せにしてるからいいとして、斧を持ち上げるための筋力がたちない所が辛い。

どうにか5〜6回叩きつける事で割る。

ガイさんの場合、訓練と言いながら、やっていることはこういう家事のことだ。

ガイさんが言うには……。

「まずは基礎体力と筋力を鍛えないといけないからな。お前の場合片腕だけだから余計に筋力が必要だ。だから、薪割りでもして筋力を上げる。」

家事の面倒な事も消費できるし、筋力UPもできるしで一石二鳥じゃないか」

・・・との事だった。

まあ、それを言われてしまつと納得してしまう俺である。

ガイさんから聞いたのだが、俺は他の人より何倍も良いほうに成長するらしい。

なので、これを短時間やっているだけでも十分鍛える事になるそうだ。

「とおうつ!!」

再び何回も叩きつけて新しい薪を割る。

やっと100本割り終わり、その場へたり込む。

前まであんな便利な生活をしていた俺にとって結構辛いです。

一応、運動とかもしていたからまだマシというべきだが・・・。

「あゝ…もお、疲れるなあゝ」

ガイさんに言われた仕事はまだまだ残っているのだ・・・。

使い古された木製のバケツのようなものを片手に持ち、生活に使う水を得るために森の中の川に向かって歩いていかなければならぬ。

この数日でどうにか森の中を歩き回れるようになった。

道を覚えたり、目印をつけたりなどいろいろ頑張ったものだ。

一応懐にはナイフが一本ある。

ガイさんに渡されたもので魔物に遭遇したときに使えと言っ事だ。まあ、基本的には逃げようと思ってるので関係ありません。

「めんどくさ〜っ。・・・というかガイさんは俺に面倒な事を全部おしつけてるだけじゃね？」

そんな事を考えながらもバケツをもって森の中に入っていく。

川専用につけた目印は木の俺の目線の高さにつけた×マークの大きな切り傷だ。

それを追って少し早めに歩いていく。

すると、赤い液体のような物が視界の隅に確認する

「おっと・・・レッドスライムだっけか・・・？」

慌てて木の陰に隠れてやり過ごす。

ゲームで定番のモンスターなどもいるようで、見たときには少しだけ興奮した。

そして、スライムが通り過ぎるのを待ち、木の陰に隠れる事をやめる。

レッドスライムは物理攻撃と火に強いはずだった気がする。

物理攻撃に強いのはスライム全体的にそうだが、レッドスライムは火属性の魔法には多少の免疫があるそうだ。

前にガイさんが火属性の魔法で焼き殺していた事があったのだが、俺が教えてもらった情報がおかしいのか、それとも俺の目が可笑しいのだろうか、これには少しの時間悩んだ。

まあ、とりあえずは川に行かなくては……。
早くやることは終らせるに限るからね。
魔物にあつた事からえつちらほつちら、と走っていく事にした。

そして、数十分走つていくと川につく。
バケツいっぱい水を汲む。
綺麗な水みたいなので手ですくって飲み、喉を潤す。

「とりあえず帰るか……。バケツ超重いし……。
悪態をつきながらも俺は早足で森を進んでいく。
さすがに走るとこぼれちゃいそうだから、やめておこう。」

「えっほ……。えっほ……。
やっぱり世の中苦労する事が多いです。
いやいや、異世界なんかに来てる時点で苦労物だけでも、その前にいろいろ思い出したくないことが起こつたし異世界に来たのはほぼ正解と言つて良いだろう。
偶然来ただけだけでもね。」

そして、来るときの2倍程度の時間をかけて森を出る。
ちゃんと目印を追ってきたので家の前に出た。
ここまでの道のりで魔物に会うことは無かつたので俺的にホツと
している。

「ガイさあ〜ん、今日の仕事終わりましたよ〜」

水をそのまま持って家の中に入り台所にある大きな桶に水を流し入れる。

水は少なくなっていたのでガイさんに入れるといわれていたのだ。

何で面倒なことは俺に任せるのかな〜・・・。

ちなみにガイさんはいえの中でまったりとくつろいでいる。

今は夕方。薪割りを始めたのはお昼より少し前なのでそれなりに時間がかかった。

「あ〜、帰ってきたか。トオルう〜、そこにレッドベアーの肉を適当なサイズに切った物があるから料理してくれる?」

「ガイさんは俺のこと召使とかだと思ってるんですか?」

「そんな事思っちゃいねえよ。ただ、弟子は師匠の面倒をみねえといけねえだろ?」

あ、俺はガイさんの弟子になつてたんだ。

その割には魔法のほうなんて魔女さんに任せてるな・・・。

まあ、とりあえず言う事を聞いておくか。

溜息をつきながら俺は肉を掴んで台所の方へと移動し、前に魔女さんに教えてもらった不完全な火の魔法で火をつける。

そこに多分フライパンだと思われるものに乗せて、そこに油をひく。

ちなみに、ガイさんが言うにはこの油は動物・・・まあ、魔物と言うべきか。とりあえずは魔物のものだそうだ。

「あゝ、トオル。俺ピリツと辛い感じが良いからな」
あつそ。

「どんなもの使えば良いんですか」
「リビング(?)でゴロゴロしてる赤髪野郎に少しイライラしながらも一応は聞いてみた。」

「あゝ、便に赤い粉入ってるだろ。それは辛い木の実をすり潰した
ものだから使ってくれ」

とりあえずはその赤い粉を少なめの水でとき。

とよくわからない木の実を砕いたもの(少しかじってみただけア
ーモンドに近かった)を混ぜてみる。

あと適当に辛味以外の味がつくように木の実や粉を入れていく。

超テキトーです。

正直料理なんてあんまりしたときありません。

フライパンに肉を載せて色が変わってきたら、よくわからない形
の二種類の野菜(食感などがレタスとモヤシに近い)が形が・・・
を入れてさっき作ったタレをフライパンに注ぎ込む。
それで十分焼いたら終わり、と・・・。

テーブルの上に、肉を盛り付けた皿とパンとチーズを乗せた皿、
あとは水を注がれているコップなどを置いて終わりかな？

正直これ以上は知らん。スープとかめんどくさいからだ。

あと、ガイさんを酔っ払いにすると厄介な事になるので酒などのアルコールの入ったものは全て俺が隠しました。

これは魔女さんの授業を受けた日と同じ日の夜に体験した事による処置です。

「少し味付けが薄くないか？」

「悪かったね。料理が下手で・・・」

そんな食事である。

7話 訓練(?) (前書き)

タイトルの最後を変更。

初期では「冒険」が思いつかずに「旅行」にしてあったので、「冒険」に変更。

7話 訓練(?)

今はガイさんにイラつきを隠せなった日の次の日の午後だ。
(料理について言われたときだ。料理なんてよくわからないのに俺にやらせたお前が悪いんだ、という話だ!!)

「んぐぐぐぐっ!..!」

手に持った石に向けて集中する。

手に持った石は白い光を放つが弱々しくはじけそうに無い。

「むががががつ!!」

頑張れ俺。やれるよ、俺ならっ!!

「んぐぐぐぐっ!!」

白い光は段々強くなっていく。

ちなみにこの作業は既に4時間程度行っている。

何事も諦めずに行う事が大切なのだ。

ちなみに……俺が諦めずに行って報われた事は一度も無い。

「お、俺に魔力をわけてくれっ!!」

「自分でやらなきゃ意味ねえだろ」

俺がふざけた声をあげながら力りきんでいると、イスに座ってくつろいでるガイさんが俺にツッコミをいれてきた。

「んぎぎぎぎぎっ！！」

あんたはくつろいでるんだもん、いいよねっ！！
地味にこっちは疲れてるって言うのになっ！！

「もっと多く魔力を注ぎ込めよ。今日の晩飯になしにすんぞ」

「・・・っ。いつつもいつつも人に作らせておいて、なに言っトン
じゃポケエエーッ！！」

そんな俺の怒りの叫びと共に手の中の石が一瞬青くなったと思う
と甲高い音を立てながら砕け散る。

「おお、やったな。全ては俺のおかげだぞ」

……だが、そんなことは関係ないっ！！

今はこの腐れ赤髪をぶちのめしてヤンよオオっ！！

おおおおおおおっ、という雄叫びを上げながらブチギレした俺
はガイさんに殴りかかった。

当然本気で・・・。

） 15分後 ）

「・・・たく、お前如きが俺に一発も叩き込む事ができるわけないだろう？」

「・・・はい、すみませんでした。ごめんなさい、調子に乗った俺がわるうござんした」

結果、俺はガイさんに縄でグルグルまきにされてイス代わりにされていた。

ちくしょおおっ！！ わかっていたこととは言え、ここまで圧倒的にやられると思わなかった。

「年上を敬え、そして大事にしろ。お前を一年間この世界で生きていけるまで鍛えてやんのは俺なんだぞ。

喧嘩を売ったり買ったりするにしても、時と場合を考える。この世界じゃあ、ひどい場合だと死ぬぞ。

まあ、丁度良いから今日はこれだけを教えてやったぞ」

「・・・はい、とつてもためになりました」

俺の棒読みの返事。

ていうか、縄解け、その前に俺の上からどけ。

「よし、じゃあ適当なサイズの木の棒を持って表に出ろ。俺がフルボッコにしてやる」

そこは訓練してやる、とかの方が良いのではないのでしょうか？

ガイさん。

ガイさんは俺の縄を解くと木の棒を二つ持って外に出る。
ていうか、木の棒って・・・あれですか？ 初期装備ですか・・・
？

「まあ、木で作ってある剣なんて俺が持ってないからな。それに訓練なんて、こんな棒で十分だろ」

ああ、初期装備を意識したわけではないのですね。

まあ、初期装備とかなんて知ってるのなんてこの世界にはほぼいないか。

「ん〜・・・じゃあ、お前からこの木の棒で襲って来い。俺を正当な理由でボコボコにできるぞ？」

そんなことを笑いながら言い、俺に気の棒を投げ渡してくる。

それを俺はうまく片手で受け止め、構える。

ああ・・・小学生のときに剣道を少しだけかじってみただけど、さすがに両手じゃないからやり辛いな・・・。

「・・・ふっ！！」

短く息を吐きながら木の棒を横に振ってガイさんの左眼球を狙う。
正直剣道とか関係ないです。

まあ、俺の目的は・・・もう片方の目も使えなくしてやるうって
いう事です。俺ってえげつねえな・・・。

まあ、それは当然ガイさんの持つてる木の棒で防がれるわけだ。

「お前、異様な場所狙ってきてんな・・・」

俺の狙った場所に気づいたのかガイさんが呆れ顔でそんな事を言ってくる。

だが、とりあえず俺は気にせずに木の棒を移動させて両足の間の男の勲章を狙う。

「うおっ!?!」

ちっ……やっぱり避けられるか……。

ガイさんは俺の木の棒を避けた後に、自然な動きで俺の額に木の棒を打ちつける。

「いたあっ!!」

うわぁ……マジで痛い……。

「くおんの……っ!!」

涙目になりながら木の棒を大振りに横に振るう。

それをガイさんは上に跳んで避けると、余裕の笑みを浮かべながら俺の手の甲、額、横腹に一瞬の内に木の棒を一発ずつ叩き込んできた。

当然俺は全部食らって痛かった。

「手加減してくださいよ、ガイさん!!」

「これでも十分手加減してるぞ。お前が弱すぎるだけだな」

「んにやるっ!!」

よく映画とかにあるように足で砂を蹴って目をくりました後に後ろに回りこみ、思い切り木の棒を叩き込む……のだが、木の棒で防がれた。

「さっきから言おうと思っていたが、特別な動きはしなくていい。

お前は人間を相手にする事も多くなるだろうが、基本的には魔物の方が多いだろう。魔物にこんな小細工は意味がないし、人間相手にするとしても小細工はある一定以上の実力を持った奴だけがすることだ」

そんな声が聞こえると同時に額に本日三度目の木の棒がヒットした。

「いったあゝっ!!」

地面の上をゴロゴロと転がりながらもだえる俺と、俺の様子を見て楽しそうに笑っているガイさん。

それは訓練の前に日常でも多いシーンだった。

8話 宿題

ガイさんにフルボッコにされた次の日。

この日は魔女さんの授業の日だ。

「まあ、そんな感じで魔力石は弾けたんですけど・・・それよりもガイさんにイラつきが隠せません」

俺の怒りの言葉を聞いた魔女さんは静かに微笑んだ。

「ふふっ・・・魔力は、感情が影響するときもあるからね。

多分、あの男はそれを意識して言ったのだと思うわ。まあ、だからといってあの男に感謝はしなくて良いと思うわよ。

多分自分が楽しむためもあったでしょうから」

「絶対に感謝はしませんよっ!!」

あんな奴に感謝するぐらいなら・・・うん、続かない。俺は何を
考えようとしていたんだろうか？

まあ、いいや。気にしない。

「じゃあ、次の宿題ね。はい、これ」

魔女さんが俺に渡してきたのは皮の袋だ。

その中にはたくさんの石が入っていた。

「これは・・・?」

「前と同じ魔力石よ」

「……これを全部はじけさせるとか？」

「違う違う、あくまでコントロールできるようにするためだからはじけちゃうと意味がないわ。」

「はじける前に白い光から青い光にならなかった……？」

「そういえば、なった気がします」

「その青い光のまままで維持できるようにして、そうすればコントロールは完璧ね。」

「少しだけやってみて」

「魔女さんに促されて袋の中の石を取り出し、思いっきり魔力を流す。」

「一回できた事なのでだいたいのコツは掴んだから結構できるだろうな。」

「ぶぐううううっ……！」

「白い光は強くなっていき青に変わっていく。」

「おし、ここで止めねば……！」

そんな感じでコントロールしようとするも、すぐに白い光に変わってしまい。

慌てて魔力を注ぎ込むと甲高い音をたてて魔力石は砕け散った。

「……」

しょんぼりしてる感じの俺。

「まあ、難しいからコントロールの訓練になるのよ。

諦めずに気長にやりなさい。ここにくるのは青い光のまま一分間維持できるようになったら来ると良いわ。

次は呪文をいっぱい教える授業になるからね。まあ、魔力石をクリアできればだけどね」

魔女さんは微笑みながらこっちに手を振ってきた。

なので手を振り替えてガイさんの家に向かって歩き始めた。

「俺は、隻腕のおお」

歌っているのは『ぐだぐだの歌』

作者：徹

特に歌詞は決められていない。

その場の雰囲気と感情で決められるとつてもみんなに親しまれている歌だ（嘘です。すみません）

まあ、そんな感じで歩き。ガイさんの家に着いた。

そして、扉を開けて家の中に入っていく。

「……今日の魔法授業とやらは終わりか？」

ガイさんが俺を見るとそんな事を聞いてくる。

「ええ、今日は終わりました。宿題が残ってますけどね」

「ん？ 宿題って？」

「魔力石を青い状態で一分間維持しろ、だそうです」

「短い期間で進んでくな。魔法を教える所では、普通なら一ヶ月以上頑張ってそこまで行くんだけどな」

「そんな所があるんですか？」

「ああ、あるぞ。」

まあ、そんな所に行くやつは、才能の認められた極一部の貧しい身分の奴や貴族のような金持ちばかりだけだな。

まあ、お前なら将来有望だし入れるだろうが、めんどくせえからつれてかねえけどな」

「・・・はいはい。」

それで今日はどんな料理が食いたいですか？・・・？」

「川で魚を取ってきたから、それを焼くだけでいいぞ」

「今日は無理じゃないものを望んできてますね」

「お前の料理には諦めたからな」

下手でごめんなさいね。ぺっ……！！

とりあえずは台所に行き、テレビや母が昔料理していた所を思い出して内臓などを取り出す。

一応、ナイフの使い方などはガイさんに教えてもらったのでスラスラとやりたいように切れていく。

まあ、ナイフはいろいろと使えて日常生活では便利だからね。

「俺のやつには塩水に浸してから焼いてみよ」

まあ、料理したときが無いから味がつくか分からないけど、とりあえずは30分程度つけてみるか……。

うむ、ガイさんには味付けなんてどうでも良いな。塩水につける奴のほかに口から串を刺して表面から塩を塗りたくってやる。前にこんな感じのことをテレビでみた気がする。

塩水に浸しておくのは前にインターネットで「塩焼き」というキーワードで検索した時に「ゴキブリの塩焼き」というとても気になるサイトに書いてあったのを思い出したからだ。

創造するだけでも嫌だし、そのGの塩焼き画像まであったのだから気色悪かった。

「それにしても、魔物のように変な怪物しかないのかな」と思ってたんですけど普通の魚もいるんですね」

正直、前の世界の何の魚に似てるとかはよくわからないけど、魔物のように赤い熊とか変な姿ではないので驚きだ。

「お前が見てきたように特別に赤かったりとか凶暴な奴だけではないしな。」

中には人になつく奴だっているんだからな」

ガイさんがねっころがりながら俺にそんな事を言ってくる。

ふむふむ、来たばかりじゃあ、俺の知ってることなんて無いし、参考になるわ〜。

いろいろと学んで行かないとな〜。

9 話 村

今は、魔女さんに宿題を出されてから三日たち、ガイさんと一緒に森に一番誓い村に居た。一番近いといっても行くのに3時間ぐらしかかったのだが・・・。

ついでに言うと、宿題の方は今まで7回試した内、全て破裂した。正直、いつも謎に思ってたんだが手の中で破裂したら手が傷つくんじゃないかな、と思ったんだけど破裂した後の石は見事に俺の手を傷つけていった。最初の二回〜三回は偶然俺の手を避けていたみたいだ。

なので俺の手は今軽く包帯が巻かれていたりする。

「んで、何を買に行くんですか？」

「ああ、お前に武器を慣らさせとかなないといけないだろうからお前の訓練用の金属の武器を買ったためだ」

ほうほう、それは男の子としてワクワクドキドキするイベントですな。

俺は貸してもらってる服で歩いていて、ガイさんはいつもの赤い剣と肩にデカイ何かを担いでいる。

結構重そうだ。まあ、片手しかないからかわりに持つ気はない。

「高いんじゃないんですか？」

「ん〜？ 高いだろうが俺の所持金なら問題はないな。」

まあ、町で今まで貯めた物を売りに来たわけでもあるから、ついでだよ、ついで」

そんな感じで歩いていく。

「最初はどこに行くんですか？」

「換金所だな。俺のよく行く所に行くから面倒な事にはならないだろ。」

世の中金をできるだけ手に入れようと何するか分からない奴らばかりだからな」

「でも、ガイさんなら撃退はできるんでしょ？」

「当然」

そして、ある建物の前に到着する。

その建物の看板は金貨をイメージした物だ。

「おう、ジジイ。久しぶりに来てやったぞ」

そんな事を大声で言いながら建物に入るガイさん。

それに続いて俺も中に入っていく。

「別に来てくれなくてもいいんだけどもねえ……」

その建物の中には白い顎鬚を生やした一人のご老人がいた。

そのご老人はガイさんを見た後に俺を見て楽しそうに目を細めた。

「おや？ 見ない内に子供でも作ったのかい？」

「アホか。俺が今更そんな事するわけ無いだろう」

「まあ、昔の事を考えたらしないだろうねえ・・・」

老人は顎鬚を片腕で撫でながら笑っている。

そんな老人を無視してガイさんは何かガッツシリと入った袋をテーブルんも上に置く。

老人は袋の中身を見ていく。

「レッドベアーの皮に牙と爪、あとはヘルバウンドの皮、ポイズンサーペントの牙、レッドスライムのコアと・・・あと小さくて質はあまり良くない魔力石。魔力石が10つに他の物が20つずつか。

ガイ、今回は少なめなんだねえ」

「ちょっとばかり面倒のかかる子供を預かってるからな」

「お前の生活には、面倒のかかる子供がいたほうが有意義だろうって

「・・・？」

正直、二人とも俺を置いて会話しないで欲しい。

…というか、俺の来る前のガイさんの生活は一体どんなものだった

たんだ？

「うつせえ……それより、それ全部でいくらなんだよ」

「銅貨70枚程度かね……？」

「何で疑問詞なんだよ……」

「……あの、銅貨っていくら分の価値なんですか？」

だから、俺を置いて会話しないで……てか値段わからんし……

「おや？ この少年は基本的なことを分かんのかい？」

「……こいつは少し訳ありだね。」

まあ、昔、例の勇者に聞いた話じゃあ……石貨という一番価値の低いお金が1000円分と考える。

石貨100枚で銅貨一枚分、銅貨100枚で銀貨1枚分、銀貨10枚で金貨一枚分だ」

ふむふむ、一枚分の値段は石貨が1000円、銅貨が1万円、銀貨が10000円で、あと金貨は10000万円か。

金貨たけえっ！！

ということは、さっきの素材で70万円ですかっ！？

「質は悪くても魔力石はそれなりに高いけど、他の魔物の素材はガ
イにしては珍しくあまり高いものじゃなかったから、今回はその程
度だい。」

まあ、あの森の魔物自体結構高い奴が揃ってるんだけどね」

「ふむふむ、ありがとうございます」
とりあえず、教えてもらったし礼を言っておこう・・・ご老人に。

「・・・何で俺じゃなくてこのジジイに頭下げてんだよ」

「ガイさんにはお礼は言いませんよ。
今まで仕打ちの事を考えれば・・・まあ、あとは後約一年間ぐら
いはお礼を言いつぱなしになるのはいやですから、俺を言うんだっ
たら最後にまとめて言おうと思っってますから」

「めんどくさいだけだろ・・・」

「そうですね、なにか？」

「・・・まあ、ジジイ今度また来てやるよ。じゃあな」
ガイさんは俺の事を無視してから、俺に70万円の詰まった袋を
渡すとご老人にそんな事を言って建物を出て行った。

「じゃあ、さようなら。おじいさんっ!!」

「ガイはともかく少年は、また来ると良いよ」

そんなことを言うとおじいさんは笑いながら俺に手を振ってきた。そして、俺もガイさんを追いかけるように出て行った。

「次は訓練用の武器だな」

「どんな武器にするんですか？」

「なるべく俺が使ってるような武器と同じのほうが良いな。俺と違う武器だと教えるにしても少しばかり苦労するからな。まあ、俺が・・・だが」

「じゃあ、俺に買うという武器は剣で決まり、というわけですね。」

「剣でも俺の範囲内です。」

「・・・というか、俺的に剣は大歓迎ですね。」

そして歩いていくうちに、剣と斧のマークの看板がかけられている建物についた。

ふむふむ、これが武器を売ってる場所なのですね、どうやら鍛冶屋らしい。

そして、ガイさんが建物に入っていくので俺も一緒に入っていく。

「まあ、最初は片手剣だな。……………ということは、バスタードソードで良いんじゃないか？」

ガイさんに渡された剣はズッシリと重かった。

でも、何故か振れないほどの重さではないのだ。

多分、ガイさんに会う前だったら、もう少し重かったと思う。

多分ガイさんが言っていた、肉体が良い方向に成長していくのと今までにガイさんに薪割りとか水汲みとかでこき使われていたおかげもあるのだと思う。

「うん、片手剣ならまだ振れるな。」

まあ、一年後の目標としては俺が使ってるようなロングソードを使うことだから、もっと訓練しときゃならんな」

そんなことを言いながらガイさんは片手剣を買う事にしたようだ。

「銅貨20枚ですね」

店主（らしき人）さんがその値段を言った。20万円……………

！！

「少しばかり高くないか？ 普通なら銅貨15枚だと思うが」

ガイさんと店員さんが話し始めている。

ちなみに俺は本物の剣を見れて大興奮、他にもいろいろと見回っている。

「うちは騎士団でも使われる武器を作っておりますので、それなりに質がよく値段も高くなります」

ガイさんがそう言われると、まじまじとバスタードソードを見た後に納得したような顔になる。

「確かに質の良い物だな、これなら20枚でも文句はなさそうだ」

「ありがとうございます」

それに対して店主はニツコリと笑うと嬉しそうに答えた。

ガイさんは豪華20枚を差し出すとそれを店主は受け取る。

「じゃあ、その良い腕で少しばかり作って欲しい物がある」

すると、ガイさんは肩に担いでいたものを店主さんの前に出す。

その中身を店主さんは確認すると、なにやら驚きの表情になった。

「これは・・・なかなか手に入らないものをもっておるのですね・・・」

「ああ、昔少しだけ手に入れる用事があったからな」

「うむむ？ 何の話をしているんだ？ という感じで中身を確認しようとするのだが、ガイさんにアイアンクローのような状態で抑えられていて確認する事ができない。」

「ふむ、これで何を作れと？」

「ガントレッドを作ってくれ」

「・・・この量だと二つは作れませんが」

「別にそれでかまわない。

どのぐらいの期間で作れるんだ？」

「これは加工が難しいので、10ヶ月と少しですね」

「わかった。それでかまわない。それで値段はどのくらいになる？
だから、何の話をしてるんだ〜っ!!?!? てか、俺が全然話して
ないぞ〜!!!

「うつむ・・・今回は自身での持ちこみなので少しばかり安くなり、
材料が材料なので・・・銀貨4枚でしょうか・・・」
400万円・・・だと・・・っ!?!?

「それぐらいなら軽く払える。それでかまわないからやってくれ。
硬度があり、できるだけ軽く、動かしやすいものにしてくれ」

「わかりました。全力をそそいでやろうと思います」

「宜しく頼む。また利用させてもらう」

「まいどどうも。またのご来店をっ」

・・・と、そんな感じの会話があり、俺は何の話か全然分からず・

った。そして、俺はアイアンクローの状態でガイさんに引っ張られていた。

「いだだだだっ!!!」

地味に顔に指が食い込んでいて痛かった。

9話 村(後書き)

バスタードソード、15万円。テキトーなサイトを参考にした。
間違ってる可能性あり。

10話 訓練

今日は村に行ってみて一週間たった。

魔力石の方は惜しいものの成功していない。

そして袋には予想以上の魔力石が詰まっており、完全に入らないだろ、と思うほどの魔力石が入っている。

その数は底が見えない。

ガイさんに聞いたところ、これは魔法がかかっており中にたくさん量のものを入れられるらしい。

相当便利なもので価値は相当の物のようだ。

魔女さんには時々コツを聞きに行く、というよりこっちに来ることが多い。

それは何故かという単純な事だ。

「だって、せっかく暇つぶしが見つかったと思ったのに、私が出した宿題のせいで寂しいんだもん」

・・・だそうだ。

だったら、そんな宿題出さないほうがいいでしょうに・・・。

まあ、そんな感じの日々が続いており魔女さんはこっちに来る事もそれなりに多くなる。

それを見たガイさんは微妙な顔をしていたが何でだろう・・・？

まあ、今ではガイさんと訓練して、それなりにガイさんの攻撃を避けられるようになってる。

まあ、ガイさんは手加減をしているだろうが・・・。

「ふっ!!!」

バスタードソードを横に振るい、ガイさんの胴体を狙う。

それをガイさんは余裕で避け、鞘に収めたままのロングソードで俺の額を狙う。

「うわっ!!」

それを体を後ろに反らすことで避ける。

俺の目の前をロングソードの鞘が通過して行った。

「うん、ちゃんと避けられるようになってるな」

そりゃあ、ガイさんに殴られまくったからね。

結構慣れましたよ。殴られるのに慣れるってめっちゃ悲しいけどね。

「あとは剣筋をもっと鋭く、速くしないとな」

「これでも結構本気で振ってるんですけどねっ!!」

剣を何回もガイさんに向けて振るうが、ガイさんは冷静にそれを防いでいく。

「・・・ふっ!!」

まだまだ剣を握って日は浅いけど、男の子としたり一撃でも入りたいのでガイさんの懐に潜り込むように移動する。

だけでも、ガイさんは軽く後ろに下がって剣を振るい俺が懐に入るのを軽く阻止する。

「懐に入るんだっいたらやっぱり素手だな。剣じゃあ逆に振れなくなる。」

まあ、懐にもぐる事自体は良い行動だから、本当に強い奴だとそういう所は剣の持ち方や振り方を変えて攻撃してくるけどな」

「おわあっ!?!」

ガイさんは軽い説明をしながら俺の体に向かって剣を振ってくる。避けるのに集中して大体を聞き逃したから分かんけど、強くなったらやってよし、ということだねっ!?!え? 別に自分で勝手に話を作ってなんていないよ

「あと、一つ一つにそんな大げさな反応はしなくて良いぞ、相手に弱点を教えるようなもんだ、味をしめられるからな。」

平静を装え、それも大事な事だな。戦闘だけじゃなくても弱みにつけこもうとする奴は大勢いるからな」

「ぐにゅっ!?!」

ガイさんの剣を自分の剣で防御する。

「それも、どうかと思っぞ・・・」

気にしない、絶対に気にしない、気にしてなるものか。

「まあ、そろそろ終わりだな。おらっ・・・!!」

「んわあっ!!?」

ガイさんに腹に蹴りを入れられ、次の瞬間に俺の頭にガイさんが鞘で一発入れた。

超痛い・・・手加減して欲しい・・・。

「剣だけ集中してたらそうなるな。ちゃんと相手の全体を見ないとダメだぞ。」

「はっい」

「なんだ、そのだらけた返事は・・・」
あんただってだらけた指導をしただろ。

「まあ、とりあえず今日は終了。お前は俺の飯を作れ」

「えっ・・・」

「飯を作れ、作らないと今度から本気で殴りに行く」
チッ・・・やってやりますよ・・・ケツ、ペッ・・・。
人使いのあらいですことっ!!

そんな感じで、俺は剣を鞘に収めてガイさんと家に入っていく。
その後はいつもどおり台所だ。

「あれ？ 今日はいさんスープ作ったんですか？」

「ん？ ああ、お前の薄味の料理だけじゃあ、嫌になったんでな」

「へんっ！！ 俺はいさんのことを考えて薄味にしてやってんですよっ」

味がなかなかつまくだけなだけどもね。

とりあえずは、パンを俺といさんの分を出し、お決まりのチーズ。

あとは野菜のサラダを作っていく。スープがあるから簡単なもので問題ないだろ。

「それはそれは、とても優しいことだな」

いさんはニヤリとしながら言うてくる。

テーブルに座って準備万全だ。

俺はスープにパン、チーズとサラダをお皿に盛り付け、片手で器用に複数の皿を持ち、テーブルの上においていく。

あとは、果物のジュースを俺のところにおいて、いさんには水。いさんが変な目を向けてくるが、俺は無視する。絶対にアルコールの入った飲み物は出さない。

「お前…酒ぐらい良いだろ。…ていうか、お前何歳だよ？」

「俺は15歳ですよ。…お酒を飲みすぎると体に悪いんですよ」

「お前、15歳ついたら成人だろ。もう少し年が低いと思ってたが…」

「確か、この世界では14歳から成人でしたっけ…。悪いですね、童顔で」

「お前、人生から酒をとったら、俺にとってのこの世は地獄だぞ」

「心配してあげてるんですよ、ガイさんを心配してあげてるのは俺ぐらいのもですよ」

「というより、ガイさんが酔っ払って殴ってくるから飲ませないだけだけでもね。」

「俺に被害が来るから絶対にいやなんだよ。」

「…まあ、確かに居ないだろうな」

「あれ？ガイさんの顔にブルーな雰囲気か…。」

「そういえば、ガイさん家族は？」

「・・・うん、お前は世界の事を甘く考えてるだろうからな。
俺の思い出したいくない実体験を教えてやるよ」
ガイさんは気楽なしゃべり方をしているが、その目には悲しい色
が浮かんでいた。

「・・・あと、お前は不謹慎をいう言葉を知れ」
そして、微妙にキレていた。

10話 訓練(後書き)

誤字・脱字があれば御報告ください

11話 ガイ

「お前、この剣を覚えてみる」

ガイさんが愛用の赤い刃の剣を、少しだけ鞘から抜き俺に見せてきた。

「・・・？」

「ここにある紋章だよ」

ガイさんが指差した場所には、まるで盾の様な紋章がある。

金属を削って精巧に造られたものだ。一本の剣が盾の紋章の中にあっただ。

「ん、なんか騎士様が持つ家紋のような物ですか？

いや……でも、ガイさんが騎士って……」

絶対にありえない気がする。

「お前……人の事を馬鹿にしているな」

訓練という名目でストレス発散のため、俺に暴力を振るうガイさんのような人など人などとは思いつもりは無いつ！！

俺の考えてる事って軽くひどいな……。まあ、全て冗談だけども……。

「俺は一応これでも騎士だったんだぞ。」

騎士だったからこそ、勇者という重要な人物とも自由に話す事ができたから、今のお前の状況があるんだぞ。

感謝しろよ」

「えっ!!? ガイさん騎士だったんですか!!?」

ガイさんの衝撃の事実。

でも、ガイさんが騎士って・・・どんだけだ・・・。

「はあ……少しばかり殴りたくなってきた。

……ていうか、勇者の所は触れないのかよ・・・」
殴るのだけはやめていただきたい。

勇者の事になんか絶対に触れてなるものか、というか触れる理由がない。

「でも、騎士?だった”・・・?」

「ああ、俺は騎士をやめたんだよ」

ガイさんは剣を鞘に納め、壁に立てかけてから再びイスに座る。
その間に俺はパンをちぎって食べている。

「まあ、話は長くなるが・・・」

じゃあ、話さなくても良いです。…とはさすがにも言えず、ガイさんが紅茶を飲んだ後に話し始めるのを待つことにした。

「俺は、この国・・・つまり『アリミア』だが、その王都で王に近い立場で仕えていた騎士だ。」

まあ、騎士と言っても下っ端もいるし、王の近くによる事だっただけな奴もいる。その中には俺は結構、良い立場にいてな」

「結構偉かったんですね」

「少しだけな・・・。」

この国では実力があり、自分が望み、国に認められた者であれば冒険者や農民だったとしても騎士になることはできるんだが・・・当然、貴族出身の騎士は大勢いる。

俺も貴族出身の騎士だった訳だが」

「貴族だったのか・・・」

なんという・・・こんな酔っ払いおじさんが貴族・・・。

この国は終わったな・・・。

「お前、人の事を馬鹿にしてんなよ？ 一応、昔はシャキツとしてたんだぞ。あれだ、今と昔じゃあ、茹でたそうめんと茹でる前のそうめんの硬さ程の違いがある。」
「どんな例えだ・・・。」

「まあ、話を続けるが俺はその騎士の中で、王の邪魔をする貴族を捕らえるという任務に出たわけだ。」

一つの国家と言っても勢力はいくつもあるからな、俺は貴族が自

分の事だけを考え自分の領地の民を苦しめる者や、王を陥れるようなことをした者を捕らえ裁くためにつきだしたりしていたわけだ。

まあ、相手は貴族だからな、そう簡単には行かないわけだが、そこはどうか捕まえる名目を捜すしかないわけだが……」

「いろいろと大変そうですね……」

なんという、微妙な感想をもつ俺っ!!

そんな反応にガイさんは溜息を吐きながら話を続ける。

「まあ…俺は当然、貴族達に目をつけられるわけだ。

何回も俺は十数人の刺客に夜襲を受けたわけだが、俺はそれを全て撃退をして、捕らえるわけだ。

拷問をしたって意味は無い、こういう奴らは専門の訓練を受け、万が一の場合は自殺をするように育てられているからな」

ガイさんは一息つき、俺の用意していた水を全部一気に飲んだ後に話を続ける。

水って雰囲気が出ないな……。

「俺だけに目をつけるまでは良かったんだ……」

「俺?だけ」に……?」

なんというドロドロ展開の予感。

「俺は、一応その国の中でも相当の実力者だからな。

相手も、いくつもの方法で俺を殺そうとしたが全て失敗したんだ

よ。

「……だから、俺ではなく、俺の家族を狙った」

「……」

「13年前の事だったが、俺には妻と10歳の息子、そして2歳の娘が居た。」

俺が王都を出て、遠くで悪さをしている魔物の群れを退治に行っていたときだった」

「……」

なんだ、このとても重いシリアスな雰囲気はッ!!?」

「俺が帰ったときには俺の家は静かで暗かった。」

さすがに可笑しいと思った俺は、家中を探し回りある部屋で足は止まったんだ。」

その中では五人の黒い布で全身を覆い身を隠した刺客が五人、そして血を流し倒れている妻と10歳の息子、今にもナイフで首元を突き刺されようとしている娘。」

俺はそれを見た瞬間、理解するよりも先に手が動いてな……次の瞬間には、五人の刺客の首は胴体から離れていた。」

慌てて妻と息子の脈をはかったがもう心臓は止まっており、娘は首の横に浅い切り傷があったが死んではいなかったし、死ぬほどのものでもなかった」

「その後、どうしたんですか……？」

「家と娘を俺の弟に任せて王都を出た。

貴族には跡継ぎが必要だからな、二人以上は子供は居る。

だから、その弟に全てを任せて王都を出たんだよ。俺の大切なものを奪ったところにいることがずっと辛かったのだろうし、もうこんな面倒な事に巻き込まれたくも無かった。

まあ、結局は俺は逃げただけなのだろうな……」

「……だから、こんな所に？」

「ああ、ここは人も寄り付かない場所だからな。

だから、丁度良い場所だった、あの世で妻達に会って責められるのではないかと死ぬ事もできず、まともな生き方もできない俺だったから、丁度よく一人になれる場所だった。

……そのはずが、うるさいガキが…俺の一人ライフを壊したからな」

悪かったね、うるさいガキで……。

「…でも、理由はどうあれ俺もガイさんも同じく家族を失っていますね」

「……あ？」

「僕がこっちに来る前に家族と左腕を失ったんですよ。

そして、目の前がよくわからなくなって自殺しようとしたら、こ

の世界に居たんですよ」

「・・・なんで、お前は今は普通の顔で生活できているんだ？
目の前が真っ黒になって考えられなくなっていたんだらう？」

「さあ・・・？ それらの気持ち全て奪われたように消えていた
んですよ」

俺がそういつとガイさんがなに考えた後、すぐに考える事をやめた
ようだった。

まあ、ガイさんだから何もわからなくなってやめたのだらうな・・・
フフツ。

「なんだ、お前。・・・その気持ちの笑いニヤけ顔は・・・」

「なんでもないです
つい笑ってしまった。

「まあ、そんな過去があるわけだから・・・この世界では弱味を握
らせることは自殺に繋がるのはあたりまえだ。

それに、この世界を生きていくことで俺のように大切なものを奪
われるのは嫌だらうからな、俺みたいな守れない力ではなく、守れ
る力をつけて欲しいわけだ」

ガイさんはそこで止まり、つい話に夢中になって冷えてしまった
スープを一気に飲み干している。

ああ、俺も食べないとな・・・、ということでもスプーンですくつ

て食べ始める事に・・・。

「だから、お前にはもっと厳しい訓練をしないとな」

「ガイさんて…そういう事考えられたんですね・・・。

というか、俺に厳しい訓練をしないで下さい。今でも十分辛すぎますよ・・・。」

11話 ガイ(後書き)

誤字・脱字があれば御報告ください

12話 黒い何か

もう、あの話から一ヶ月がたっていた。

今日はこの世界に来てから、一ヶ月と17日の時が流れている。

そして、俺の訓練のほうだが魔力石はとうにか成功した。

今では10分以上維持する事もでき、魔力のコントロールは完璧と言って良いほどになった。

結構頑張り続けて、やっとのことで成功した時はとても嬉しかった。

魔女さんには、呪文を教えてもらい始め…さらにはルーン文字や魔法陣などについても教わり始めた。

結構前に習い始めて、今では結構な量の魔法を教わっている。

そして、魔法ではなく剣術の訓練だ。

今は、ある剣術を訓練中。

日本のことを忘れたくないな、と思い日本といえばあれがカッコイイだろう!! という感じで、思い出したあの剣術を訓練し始めた。

「ふッ!!」

鞘に収めたままの剣を抜き放すと同時に相手の胴体を狙うように斬りかかる。

その速度は異常に早い。

「・・・おおッ！！？」

それをガイさんは驚きの声をあげながら剣で防ぐ。

つまりは抜刀術、・・・もしくは、居合いとも言つ。

日本の剣術だと思われるものだったので、使おうと思った。

まあ、詳しくは知らないから本当に日本の剣術かどうかなんて分からないんだけどもね。

「今は今までので一番良かったな。

十分に早いし、鋭かった。今までの筋トレがやつと成果を見せてきたか」

「ありがとうございますねっ！！」

ガイさんがしゃべりながら剣を何回も振るってくる。

なので、それらを全て剣で弾きガイさんの隙を窺う。

今ではガイさんの剣の早さにも慣れはじめ、体でも若干追いつけるようになってきてる・・・まあ、少しだけだからまだまだ追いつけていけないが・・・。

ガイさんが言うに成長スピードが天才と言っていいほどに速いらしい。・・・まあ、それは湖の不思議な力でチート補正がかかっているんだろう。

ただ、圧倒的なガイさんの技術と経験に俺が追いついていけない。

「・・・っ！っ！」

ガイさんの剣術のコンボがさらに速くなって行き、俺はそれに追いつくのに精一杯である。

隙を窺っているつもりだったが、防戦一方になっている。

「お前の言う抜刀術は最初の一発だけなのか？」

「……多分そんな感じな気がするけど、やっぱり多用していきたくない……あぶなっ！！」

最初は剣を受け流すように避けた後に二撃目に、止めを刺すって感じらしいですけど俺は習っていたわけじゃないからよく分からないです……あぶッ！！？ にやるッ！！」

剣を思い切り振るうも、ガイさんはしゃがんで避けた後に、俺に向かつて剣を振るってくる。

ちなみに、剣は鞘から抜かれているのであたったら痛い事間違いなしだろう……まあ、痛いじゃすまないかもしれないしね……。

まあ、ガイさん曰く……。

「死の恐怖が付きまどってたらちゃんと防御するように意識するだろ？ これでお前も防御が早く身につくな」

ということだ。

言葉が終わると同時に大きな笑い声もついていた気がするが、今はどうでも良い。

それよりも俺の目の前に迫る剣を避けなくては……ッ！！

「いなバウa…ゲフウツ！！？」

横なぎに振るわれた剣を、体を大きく後ろに反らして古いネタのようにして、避けようとした瞬間に、ガイさんの拳が上から下に振り下ろされて俺の腹を思いつきり叩いた。

そのせいで、地面に俺は倒れた。

「無駄な動きはせんでいいッ!!」
その言葉と共に俺の首の横の地面に、ガイさんの赤い刃の剣が突き刺さる。
これは超怖い。

「今日はこれで終わりだ。無駄な動きはしないでいいからな。
いくら避けようとした所で無駄な動きをしたら隙をつくってるのと同じ事だ」

ガイさんがそう言いながらこちらに手を差し伸べてくるので、俺はそれを掴み起き上がらせてもらう。

ガイさんに勝つのはまだまだ先の事だろう……。

「前にも言ったかもしれないが、少なくとも訓練終了の時には俺と相打ちか、もっと良い勝負をしてもらわないといけないからな」

「……大変ですね」

「それでもやってもらわなきゃ俺の納得がいかないからな」

そうですね、と俺はテキトーに返事した後バケツを持って水を汲みに行く事にした。

今はお昼の時間だ。

ガイさんにスーパの作り方を少しばかり習い。(それでも味は薄い)

そのための水を持ってこようかな、というわけである。
もう少して水がなくなってしまうので、丁度いいのだ。

「ある日、森の中あゝ、クマさんにつ……」
なにか思い出した歌を歌いながら、森の中を進んでいく。
森の中の魔物などもそれなりに倒せるようになってきて、ヘルバ
ウンドやレッドスライムなどは簡単に倒せる。
前にガイさんが大きな黒色のライオンの魔物などを一人で仕留め
ていたのだが、俺の場合は少し怖いがギリギリで倒せると思う。

「よいしょつと……っ!!」

数? さきに魔物が見えたので、バケツにつけてある紐で首に引っ
掛け片手でどうにか上手く使って木の上に乗る。

前は凄く苦労していたのだが、この頃だと腕の力も強くなり楽々
登る事ができるようになった。

木の太い枝と隣の木の太い枝を渡って、魔物の手を出せない高さ
を進んでいく。

どうやら魔物の正体は、ポイズンサーペントだ。

でかい図体を持つレッドベアを一噛みすれば殺せるような毒を持
つ無駄にでかい蛇の魔物で、俺でも一応倒せるのだが面倒なのでや
だ。

まあ、蛇を当然通り過ぎていくわけだが、俺はそのまま見ないフ
リをしていく。

「んお…?」

自分の乗っている気がミキミキと定番のいやな音をたて始めたの
で疑問の声をあげる。

俺の立っている枝ではない。

木の根元。

そして、獣の声が聞こえる、というか・・・声というよりも悲鳴だ。

「なんだ・・・？」

そちらを見てみると黒い何かに飲み込まれているポイズンサーペント。

その黒い何かはそのまま俺の乗っている気に突撃をしてくいて、俺の乗っている木の根元をへし折った。

「うおっと・・・ッ！！」

木が地面につく前に跳んで着地する俺。

「なんだこいつ・・・？ 森の中で見た事無いぞ」

俺の目の前には黒い何か。

どんな奴だか分かっていない俺にとつたら少し辛いかもしれない。

12話 黒い何か（後書き）

抜刀術って日本の剣術のような気がするけど、詳しいことは分からないから曖昧に書いてみた。

誤字・脱字があれば御報告ください。

13話 死負

森の奥。

ある不思議な力がある湖の近く。

そこにはある赤髪の男と白髪のロングヘアの女性が話をしていました。

「お前、あいつに何をした？」

「何って何かしら？」

赤髪の男……つまりガイが、イライラした様な顔をして腰にぶら下げた剣の柄を一定のリズムで指で叩いている。

その様子を見た白髪のロングヘア……つまり魔女は、楽しそうにクスクスと笑っている。

魔女にとってのこういう反応は笑いの種ではない。

「人が面倒な思いをしてこんな所まできてるんだ、おふざけはやめろ」

「ふざけてなんか無いわよ」

「嘘付け」

ガイの怒りは更に高まっていく。

眉間にしわを寄せながらも、ガイは更に口を開く。

「あいつはどんな事があつたかは知らんが、こつちに来る前に家族を失っている。その時は何も考える事が出来ないほどまでになつたらしい。」

それが今じゃあ、楽しそうに生活をしている。

まあ、別に悪い事じゃあないが、可笑しいと思わないか？」

「さあ？ 私は、こんな姿をしてるけど人間の事なんてまったくわからないからね。」

魔女は自分の感情だけしか理解は出来ないからね。わかる必要も無いわ」

「・・・あいつを自分の暇つぶしにでも使おうってか？」

「ふふ、まさかあなたが私の考えを当てるなんて思わなかったわ」

「・・・お前はそんなことを言っているが、あいつが他の人間と変わらない生活の日々を送っていけば、お前の暇つぶしになんかならないだろ」

「あの子が普通の日々を送る？ ありえないわ。」

この湖の恩恵を得たという事実がある限り、絶対におくれるわけがないわね。

必ずしもいくつかも事件には巻き込まれるわ。

今だっつてそうよ」

「あ？ 最後の言葉はどういう意味だ・・・」

「そのままの意味よ。」

まあ、あの子の巻き込まれることにあなたも巻き込まれない事を祈りなさいな。

今回は無理そうね」

「あ…？」

ガイが何か聞く前に、それを大きな轟音がなぎ払う。砂煙が舞い、一瞬視界が見えなくなる。

少し時間がたつと砂煙は段々と晴れていく。

「……いきなりなんなんだよ」

ガイは平然と立っている。

だが、片手で掴んだ赤い刃で後ろから猛突進してきた黒い何かを振り向かないままの姿で完全に受け止めている。

「ふふふっ、人間の今の敵は確かそいつだったわよね？」

いつの間にか魔女はテキトウな木の上に登り、太い枝の上に腰かけてこちらを見ていた。

魔女の言つとおり、今この世界ではこいつらが退治されるべき敵である。

昔、人間と魔族が争っていたが、ある代の勇者と魔王が決闘して

いる時に、この黒い何かの中でも相当強力な物が乱入してきた事により、勇者と魔王が共闘した。という昔話がある。

それが真実か嘘かはわからないが、それをきっかけに和平が結ばれたといわれている。

「ああ、全体的な名前は『死負』だな。

あるかどうかもわからない幻の大陸の奥深くにあるという世界の割れ目から出てくるという、化け物だ。

異世界からマイナスの感情が集まりこの化け物が生まれる、とかいろいろ言われているがまだまだよく分からない生物だよ」

ガイは黒い何かがさらに足に力を込めてくるも一歩たりとも動くことは無い。

「ふッ!!」

ガイが腕に思い切り力を込めて、黒い何か・・・死負を弾き飛ばす。

それと同時に死負の周りを覆っていた黒いものが飛び散り、その姿がわかった。

それは黒い狼。

全てが黒い・・・爪も目も牙も全てが黒く、生きているとは思えないようなものだ。

「獣型の四足歩行・・・つまりF級か、名前付きではないな」

この世界ではS、A、B、C、D、E、F、Gの8つのアルファベットでランク付けされる事が多い。その中では下から二番目。

「名前付き」というものは強力な物には名前がつけられるのだ。

あえて言えば、ガイが前に狩った黒いライオンはDランク。
この森では最大でBランクのものが居る訳だが、そこで生活して
いるガイにとっては関係ないものだ。

ガアアアアアアアアアアツ!!

黒い狼が雄叫びのようなものを上げながら、凄い勢いで突っ込ん
でくるがガイはただ手に持った剣をブラブラと下で構えたまま揺ら
している。

「ふッ!!」

死負の牙がガイに食らいつこうとした瞬間に、ガイの持った剣が
振り上げられ黒い狼の体を右と左に真っ二つに切り裂いた。

死負は黒い血のような液体を撒き散らしながら地面に転がり、次
の瞬間には蒸発し、気体になって消えた。

「さすがは元騎士様、簡単に殺すのね」
魔女が笑いながらそんなことを言う。

「お前：完全にあいつを見張っているな・・・お前が意識すればあ
いつの五感を共有する呪いでかかけたか？」

「そこまでの魔法はかけていないわ・・・ただ観察できるようにし

てるだけよ。……言っとくけど、あなた如きが解けるような魔法だと思わないでね」

「……チツ」

「まあ、それよりも良いの？ まだまだいっぱい居るみたいよ」

「そんな事はわかっている。さっきと同じ奴が十数体だろうな……。」

まったく、死負がこの森まで来るとは……防衛している騎士や兵士は何してるんだか……」

ガイが右手を上にかざすと無詠唱で炎が吹き出す。

「この子供は痛手を受けたからこそ、回復するために力が充満しているこの森に来たんじゃないかしら？」

「ふん：そんなことはどうでもいいんだよッ！！」

ガイが右手を横に振ると、炎がガイの向いてる方向を焼き払う。するといくつもの悲鳴にも似た獣の声が聞こえ始めた。

そして、炎がおさまり消えるといくつもの黒い気体と真っ黒焦げになった木が数本あるだけだった。

「ふふっ、下級魔法でこの森の木を焦がせるんだから、あなたの火属性の魔法だけは魔女顔負けの威力ね」

森には不思議な力が充満している。
ということ、その森の中にあるものには自然と力が宿る。
雑草にも木にも、そして魔物にも。
全てに微かだが力が宿るのだ。…だから、魔物は他と比べればレ
ベルは高い。

「……でも、いいのかしら？」

「あ？」

「あれだけの数しかいないのかしらね？」
その言葉を聞くと、ふとある少年を思い出した。
魔物などの凶暴な生き物に襲われやすい少年のことを……。

「……あゝ、なんか襲われてる気がすんな」

「うおおおおおッ！ー！」
ただいま猛ダッシュ中。

後ろには、自分を追ってくる黒い何か。

「ちょ、まっ、なにこれッ！…!? どっぴいっぴいとかすか〜ッ！…!?
少年はただ走る。

13話 死負（後書き）

ちなみに、ストーリーは 主人公VS死負 が終わればいつきに約束の一年は過ぎます。

誤字・脱字があれば御報告ください。

14話 風

「あぁっ!! もうこれはどうすればいいんじやアアアーツ!!」
片腕しかないから走り難いけど、息を切らしながら全力疾走の俺。
まあ、息を切らしてるといつているが、正直息は切らしていない。
今までもまだと思われるような訓練が、俺の体力を何倍も増やして
いたみたいだ。

息を切らしている、とやったのはそんぐらい全力疾走というわけだ。

腰には、鞘に収まったままの剣がぶら下がっているが、相手がどんな攻撃や動きをするかもよくわからない状態では、手を出したら反対にやられるかもしれないので、今は様子見だ。

ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!

!

そんな獣の鳴き声と共に黒いからだからいくつもの鋭い触手が放たれた。

その先端は鋭く、俺を狙っているため、俺と黒い何かの間にあるものを貫き、さらになぎ倒しながら狙ってくる。

「ほわぁッ!!!?!」

俺は変な声をあげながら、体を大きく捻り、触手と触手の安全な

隙間に体をねじ込ませる。

一直線の突きのような攻撃だったので、避ける事は簡単だ。ガイさんの様に相手に動きに合わせて攻撃の軌道を変えるわけでもない職種は、一旦黒い何かの体の元へ戻っていく。再び突きを放ってきそそうで怖い。

「なんだ、こいつ…？ まあ、とりあえずは・・・」
「そこでうん、と唸りながら考える俺。」

その間にも触手の攻撃は続いているが、俺はそれを避け続ける。剣術とかはともかく、逃亡スキルは格段に上がったぜ、主にガイさんのせいになっ！！
まあ、それでも避けきれないガイさんの攻撃はひどいと思う。

「うん、とりあえずは逃げるか。こんなのはガイさんに任せるべし」とりあえずは結論を出した。

こつこつこのを相手にするのはガイさん・・・つまり暴力魔獣である、あの酔っ払い赤髪で十分なのだ。

うん、これをガイさんに言ったら殴られそうだから、絶対に言わないでおこう。

・・・てか、俺・・・余裕だな。

「うおわあッ！！？」

今までののは突きだったわけだが、今回は右から左に振られ、木を根元から切断しながら俺に攻撃を放ってきた。

それに対して俺は上に跳んで避けたわけだが、そこに触手の突きの攻撃が来た。

「・・・うぜえッ!!」

剣を抜刀した勢いを生かしたまま、向かってきた触手を全部断ち切った。

うん、今のは結構良かったな。

すると、黒い何かは苦しそうなうめき声を上げた。

「ふむ、よく分からない奴だから知らんけども。一応痛覚はあるわけか」

そんな事を冷静なフリをして、言った後にすぐさまきびすを返して逃げ始める俺。

「無理無理無理無理無理ッ!! 今のは怖かった!! めっさ怖かったよう!!」

そんな感じで大声を上げて、走る俺だが後ろでは怒りの雄叫びを上げながら猛突進してくる。

無駄な突進力があり、すぐに俺は追いつかれる。

うむ、片手しかないぶん走り方が可笑しくて、その分足が遅くなってしまうっている。

手を使わないで速く走れるような、まるでアニメの忍者のような走り方を考えたほうがよさそうだ。

「とりあえずは、今すぐ忍者だあッ!!」

そんな声をあげると共に、木に向かって跳び、木に着地した瞬間に再び跳んで、一瞬の内に高い木の枝の上に上る。

それと、同時にさっきまで居た俺の場所を黒い何かが通過してい

く。
いくつもの木をなぎ倒しているの、俺に当たったら…と考える
と怖くなる俺である。

「ふっふっふ、俺の場所に届くか・・・おうわぁッ!?!?」
俺が余裕の笑みをして、余裕の言葉を言ってる瞬間にいくつもの
触手が俺の胴体を貫こうと迫ってきた。
それを俺は隣の木に跳ぶようにして移り、全て避ける。

「・・・あぶねえ」
そんな安堵の言葉を漏らしている俺だが、次々と間髪入れずに襲
ってくる触手を、間髪入れずに木を移って避けまくる俺。
今までの特訓は無駄ではないのさッ!!

「ていうか・・・いい加減にイラついてきたんだが・・・」
正直、しつこく追われるのは好きではない。
というか、イラつく。
いくつも放たれてくる触手を一瞬の内に全て断ち切る。

「あッ!?! しつこすぎるッ!?!」
とりあえずは地面に着地して、計画通りに逃げる。
再びきびすを返して逃げようとするのだが、俺の足に何かが絡み
付いてきた。

「地面から黒い何かの触手が飛び出てるッ!?!?」

俺の言ったとおりの事がおきていた。

そして、その触手は俺の両足首に巻きついて、俺の動きの邪魔をしている。

舌打ちをしそうになりながらも、剣で触手を断ち切ろうとするのだが、その前に猛烈な勢いで迫ってくる足音がある。

それは完全に黒い何かの足音だった。

「・・・ッ!?!?」

何を思うよりも先に腕をクロスさせて防御の体勢に入ると同時に俺の体に真正面から大きな衝撃が走った。

まるで蹴飛ばされた石のように吹き飛ばされる俺。

空中を舞ったかと思えば、地面をゴロゴロと転がり、何?も吹き飛ばされてから勢いが無くなってきて、やっとの事で止まる事ができた。

「くっ、そ・・・、まともに、くらった・・・」

服は転がったせいで所々が破れ、服が破れるほどなので当然俺の肌も切れており、それなりに血が出ている。

相当の衝撃と言う事もあり、どうやら体に相当来ている。

今まで、魔物などを相手に戦ってきたがこんなにも大きなダメージをくらったのは初めてだ。

そんな感じのことを少しばかり朦朧としている頭で考えていると、すぐ近くから獣の声が聞こえた。

さっきの黒い何かではない。

幼い獣の声だ。

「・・・んむう？」

そちらを見ると、幼いヘルバウンドだと思われる犬型の黒い魔物たちがいた。

さっきの黒い何かはそこが見えないような黒だが、ヘルバウンドは少しばかり灰色の魔物なのだ。

だが、一匹だけ真っ白のヘルバウンドが居た。

その白いヘルバウンドは、黒いヘルバウンドに囲まれ所々を怪我をしていて、体を丸めて震えているように見える。

「いじめ・・・か。魔物のくせに、なんか人間らしいな」

俺がそんなことを言うと同時に、黒いヘルバウンドの子供達は逃げていった。

だが、白いヘルバウンドだけは動かない。

…というより、動けないのかもしれないが・・・。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ…！！

そんな雄叫びが聞こえた。完全に黒い何かの声だ。

「くそっ…しつこい奴だな・・・」

それは完全に俺の近くによってきている。

俺はさっきの体当たりで相当弱っているので、逃げ切ることは不可能と言える。

ガイさんが来てくれれば良いのだが、そんな都合の良いような展開にはなるわけが無い。

「ここで潰さないとダメか・・・やり返さないと納得がいかないし、やっぱりあいつを殺すか」

俺はそう決心して、剣を構える…というわけではなく、剣を鞘に収めて手を上にかざす。

ここは安全に行くか。

足跡は勢いを増し、俺の方に向かってきている。

その足音に、俺はさっきの事を思い出してしまい、焦って……
(しまう。)

「……『ファイアーボール火の玉』」

俺のかざした掌の上に大きな炎の球が作り出される。

そして、黒い何かは俺の見えるところに現れるがそのまま体当たりをするらしく、止まる事はない。

それ目掛けて火の球を投げた…のだが、その火の球は途中で消え去った。

「はあッ!?!?」

魔法というものはイメージが大切だ。

ということは、心理状態で魔法の質は左右される。

さっき俺は焦ってしまったのだ。それは、ある一定の焦りを超えていれば、自然と魔法はキャンセルされてしまう。

まだ手のひらの上では、俺の近くにあると言う事もあり、イメージはあまり良いものとはいえなかったが、どうにか維持できていた。だが、俺から離れてしまえばそれは意味がなくなる。

だから、消えてしまったのだ。

「・・・くそがつ！」

近くで丸まっている白いヘルバウンドをそのまま抱えて、横に転がるようにして避ける。

体が痛みを訴えているがそれを気にしてる余裕は無く、黒い何かは俺が居た場所を通過し、木をなぎ倒しながら進んでいった。すぐにまた戻ってくるだろう。

「火じゃあ、イメージが足りない・・・だったら違うのでいくか・・・集中しろ、俺・・・」

集中してもイメージがまだ足りないみたいだ。

だったら、近くにあるものでイメージをより強くし、固定しなければならぬ。

ここは森だ。

いろいろな物があるが、集中してみると一番気になったのは俺の黒髪を揺らす風だ。

「風、か。・・・次は形だな・・・」

俺は、風に何かの形を与えなければならぬ。

ただの風では、黒い何かを少し足止めすることぐらいしかできないだろう。

集中している俺だが、それを相手は待つてはくれない。木の間を凄い勢いで進んできた触手が俺の横腹を貫く。

「・・・ッ!!」

痛みに集中を乱されるが、今は絶対に集中する事をやめるわけにはいかない。

そして、俺の目線は腰にぶら下げたあるものを見た。

「剣か・・・風の形・・・刃か・・・決定だ」

形もすっかりとイメージし、それだけを考える。そして、魔力を込める。

その次の瞬間に俺に向かって何十もの触手の突きが迫ってきた。

「くらえっ!!」

それが俺に届く前に、剣を鞘から引き抜く勢いを生かしたままで、おもいつきり横に振るう。

次の瞬間には、その剣の軌道に合わせたように木が切断されていた。

それは黒い何かも例外ではなく、体が上下に別れて絶命した。

木が倒れる音が響く、木と言っても、それは一本だけではなく何十本という木が倒れていた。

「やり過ぎた・・・かな？」

俺は脱力して、地面に尻餅をつき、深呼吸をする。

黒い何かはまるで気体になったように、空気に溶けてなくなっ

いった。

「腹の傷を治療しないとな・・・」

俺の腹にある傷を魔女さんに教えてもらった治療魔法でふさぐ。完璧とはいえないが、今はこれで我慢するしかないだろう。

そして、俺が気になったのは、白いヘルバウンドだ。

「助けちゃったんだし、最後まで助けないと・・・」

そんな事を呟くと、俺は同じように白いヘルバウンド・・・めんどくさいので、シロバウンドと仮の名前をつけよう。

とにかく、シロバウンドに治療魔法をかけると一分もかからずにシロバウンドは立ち上がれるようになるまで回復した。

シロバウンドは可愛い鳴き声で鳴きながら俺を見上げるようにして、見てくる。

それをつい撫でてしまう俺だが、俺の体のいたるところにある小さな傷をシロバウンドが舐めてきた。

獣は傷を治すには舐めるのが一番だ、と思ってるらしいからしようがないのだろう。

「ん・・・この状況はどうしようか・・・」

俺が周りを見ている。

その光景は、凄まじいもので軽く自然破壊をしている俺だった。

その後は、ガイさんがなんか駆けつけてきて、体の傷なども含め、そして周りの状況などで判断されて家に抱えられていった。

なんか肩に担がれてまるで物を扱っているみたいだったが、自分

の力で倒した、と報告してみるとガイさんは嬉しそうに大笑いをしていた。

ちなみに・・・シロバウンドは、俺がキツチリ飼う事になりました。

え？ 何故かって？ シロバウンドは俺から離れないからです。

そして、俺の血・・・つまり湖の恩恵の宿った血液を舐めたらしく何か変化があるかもしれないから、放り出すわけには行かないらしいです。

傷のことを考え、数日だけ休みだそうです。

楽できますね。でも・・・ガイさんの・・・。

「死負のDランクを倒せたんだ。もっとキツイ訓練にしなきゃならんな。」

あゝ・・・あと、Dランクを倒せたからって無駄に自分が強いと思うなよ。この世界にはそんぐらい倒せる奴は結構多いからな。

ちなみに俺はAランクまでなら余裕だ。」

なにそれ、アナタはコワイ人だヨ・・・。

さて・・・これから、またキツイ特訓が開始されるのだろうか・・・。

14話 風（後書き）

次から、一瞬で訓練終了後に移ります。

やっと…やっと、冒険ができるわけです。

誤字・脱字があれば御報告宜しくお願いします。

0話 森での訓練終了（前書き）

一気に時間が飛びます。

さすがに一年なんてかけるわけがありません。

0話 森での訓練終了

「…シッ!」

人の目には見れないような速度で、鞘から剣が抜き放たれ、そのままの勢いで相手を斬る為に振るわれた。

それを剣をすばやく移動させることで防御をしたガイさん。

つまりは、さっき振るわれた剣は俺によるガイさんへの攻撃。

「ふんっ!」

ガイさんはそのまま剣を、すばやく振り俺を狙って斬り上げる。

それを俺は、体を反らし頭と胴体を後ろに持って行く事でギリギリ避ける。

俺の目の前を鋭い赤い刃が通過して行った事で、とっても怖い思いをしたが…一応避ける事ができたので良かったと思う。

「…ッ!」

既に剣を鞘に納めてる状態の俺。

今は、死負という黒い奴に襲われてから、11ヶ月以上経った。

その間に訓練していたのは、ガイさんの剣術に加えて俺がやりたいな、と思った抜刀術。

その結果は、この通り。

見るのも難しいような速度の斬撃に、いつの間にか鞘に納めているという感じだ。

「くっ…!」

後ろに跳び、またも剣を振るう。

ガイさんなどはそれを防いでしまうのだが、普通の人には見えな
い速度で剣は振るわれ、それを認識する方法は剣を鞘に納めたとき
に出るカチンツツという小さな金属音だけだ。

その音が鳴ると同時に、いくつもの見えない風の斬撃が放たれる。

「風の音を聞けば十分タイミングが分かるぞ」

そんな事を呟いたガイさんは風の斬撃・・・つまり魔法を赤い刃
で切り裂いた。

でも、それには驚かない。

今まででも何回も切り裂かれ、何回も倒され、何回もイギャアア
アア…な思いをした。

そして、ガイさんはそのまま剣を俺に向けて振るう。

それを俺は、鞘に納めたままの剣で防御し、剣を抜き放ちながら
斬りかかり、ガイさんを後ろに下がらせた後に鞘には納めずにガイ
さんと向かい合う。

「もう抜刀術とやらは終わりか・・・ツ!？」

そんな声と同時に、ガイさんが斬りかかってきて、俺の抜刀術の
速度と同等の速さで剣を振るう。

俺はそれに反応して、自分の剣で防いだり避けたりして、全ての
攻撃から身を守る。

俺もガイさんも剣は鞘から抜いている状態なので、斬られれば血
が出る。

なので、全力で相手をしているのだが、やっぱりガイさんにおさ
れ気味の俺である。

「ハアツ!!」

俺のその言葉と共に後ろに跳び、手から火属性の魔法である『^{ファイア}火の球』を放つのだが、それをガイさんは軽々と避けて俺の腹に蹴りを叩き込んだ。

「げう・・・っ」

それによつて、1〜2本ぐらいの木を巻き込みながら吹き飛ばされた後に、やっとの事に止まったのだが、俺が前を見た先にはガイさんが俺を刺すために剣を突き出そうとしている瞬間だった。

「ハツ!!」

ガイさんの短い声。

「この…ッ!!?」

そして、俺の苦し紛れの突きが放たれる。

次の瞬間には、ガイさんの赤い刃の剣の切っ先が喉元に突きつけられていた。

そして俺の剣は、ガイさんの胸・・・詳しく言うと心臓あたりに刺さるか刺さらないかの所で止まっていた。

それを確認したガイさんは剣を鞘に納める。

「…うん、なんか微妙な所があるが一応は俺と引き分けでいいだろっな」

何か微妙な表情だが、引き分けは引き分けさつ!!
正直な所、これは126戦目……つまりは、125連敗なのだ。
結構頑張つて挑み続けた所存であります。
えつと……たしか、一日10戦ずつかな……?

「えつと……じゃあ？」

「うん、俺の家から出てけ」

ニツコリと答えたガイさん。

ついに俺は家から追い出さされるわけですね……。

「あと三日後には出てもらつからな」

そう言ったガイさんは、そのまま家に戻っていく……なにやらとても嬉しそうなのは、気のせいかな。

「うふふ、あなたが出て行くと言う事は、私は寂しくなりそうね」
突然そんな声が聞こえるが、俺はそれに驚かずに答える。

「魔女さんとガイさんって、何でだか知らないけど仲が悪いですもんね」

「魔女と騎士なんてそんなものよ」

「・・・そうですか。」

じゃあ、魔女さん。多分、もう会わない気だから、今俺の目の前に現れたと思うので今言っておきますね。

俺は後三日でいなくなるので体調には気をつけてくださいね。」

「ふふ、魔女には要らない心配だけど。その気持ちはありがたくいたしておくわ。」

そんな事を言った魔女さんは手を振ると、少しずつ、そして段々と姿が薄れて行き、最後には消えた。

多分魔法で、姿を映していたのだろう。

何で直で会わないのかは、多分歩くのが面倒だからだろうな……うん、ありえる。

まあ、とりあえずは歩き出し……もう、慣れたあの家へと向かう。森の中も慣れたので、目印がなくてもスラスラと足を前へと動かしていける。

ガイさんの試験では、最初は家の前でやっていて、森の中ではなかったのだが、俺が逃げまくっていた事もあり、森の奥へと自然に進んでいた。

ガアアアアアアアアアアアアアアアア……！！

そんな雄叫びと共に茂みの中からレッドベアーが俺に向かって飛びかかってきた。

それに対して、俺は動かずにいたのだが、俺の腰にぶら下がっている剣から金属音が小さく鳴った。

次の瞬間には、レッドベアの全身が切り裂かれ、血を噴き出しながら大きな体が地面に倒れた。

「これぞ、抜刀術の真髄さ」

ふざけてそんな事を言った俺。

まあ、俺の言葉で分かるかもしれないが、レッドベアを斬り刻んだのは俺だ。

そして、そんな事を言った後は、レッドベアを手で持ち、ズルと引きずっていく。

この巨体を引きずれるまでに俺は筋肉をつけたのだから、ワッハッハッハ。

……はい、うるさいですよ。ごめんなさい。

「この肉、美味しいんだよね。何故か俺が料理すると薄味なんだけど」

ガイさんには健康を考えて…とかふざけた説明をしているけど、あの薄味は勝手になっているだけだ。

いくら濃い味にしようとしても何故か薄味になるのだから、世界の七不思議である。

そんな感じで歩いた俺は、やっとの事で家についた。

「レッドベアを狩って来たのか？」

俺が帰ると家の外に居たガイさんが俺に質問をしてきた。

それに答える前に、俺に飛び込んできた白い何かを受け止める。

それは白い犬型の魔物・・・つまりはシロバウンド（俺の中では、もうヘルバウンドではない）の『シロ』である。

え？ 名前のセンスですか？ 正直どうかと思いましたが、これしか思いつかなかったんですもの。

そして、そのシロは11カ月の時が経ったのだが、少しばかり大きくなっているだけだ。

あとは額に、青い角が生えている。

世界にはユニークモンスターというものがある。

それは、特殊変異などの事により普通の魔物とは違う姿、または強さが違う魔物が生まれる事があるのだ。

大きさはシロがユニークモンスターという事があるらしく、あまり育たないらしいのだが強さは普通のヘルバウンドの何倍もの強さだ。

そして、額の青い角は俺の魔力の固まりだ。

シロは俺の血を舐めた。前にも言ったかもしれないのだが、俺の血は湖の恩恵の塊であり、それは魔力の塊である。その魔力の量は莫大なもので、シロの体では消化不良になるらしく、その結果が消化しきれない魔力が角として額に集まったのだ。

この角は相当硬く、角での突きは上位ランクの魔物でも容易く貫くのだから凄いと思った。

、俺に飛びついてくるシロだが、その角が刺さるかも、と恐怖する俺だが、そこはシロがうまくやっているので刺さることはない。

俺のペットであるシロは賢いのだ。

「シロ、今日の飯のレッドベアーの肉は美味しいぞ〜」
そんな事を言いながら、シロの頭を撫でてやる。
すると嬉しそうに目を細め、白い尻尾は左右に激しく振るわ
れている。

なんかガイさんのことを無視してるような気がするけども、
とりあえずは気にしない。

「そういえば、トオル」

うむ？ ガイさんに呼ばれた。

というか、久しぶりに名前と呼ばれた気がするな。

最初のころは名前で呼ばれたような記憶はあるが、それは一回か
二回ぐらいで他は「おまえ」とかだった気がする。

「お前にこれをやるよ」

そんなことを言ったガイさんは、自分が使っている赤い刃の剣、
そして何かを布で巻いたものを渡してきた。

「これ…ガイさんの剣ですよね？」

「ああ、そうだな」

「それを何で俺に…？」

「ん？ 必要かと思つてな」

「……ホントにいいんですか？」

「ああ、こんな所に居る俺なんかに必要なものだからな。
それに、これは一応特別な素材で作つてあるからな。十分、役に
立つだろう」

「特別な素材？」

赤色の刃である剣を眺めながら質問してみた。

「ああ、俺が昔殺した赤竜の鱗だよ」

……はい？

え？ でも、前にガイさんに聞いた話じゃあ、竜つてSランクは
あるんじゃないか？

天災並の強さがあつて、竜に襲われた都は一晩で滅び、何もかも
が残らなくらしいじゃなかったけ……。

後俺の知つてることだと、確か『竜の谷』に大半が住んでおり、
人との争いを避けているらしい。

竜の谷から抜け出し、人間を襲う竜もいるので、それは竜が自ら
倒すか、大勢の人間が相当の犠牲を払いながら対峙するらしい。

「ちなみに、竜と戦ったのは俺を含めて3人だな。
とどめを刺したのは俺だが、なかなか大変なものだったよ」
そんな事をケロリとした感じで言うガイさんだが、それは相当大
変な事であり。普通ならありえないことだ。

「・・・この布の中は？」

「赤竜の鱗で作ったガンドレットだ。丁度、片腕分しか作れなかつ
たからな」

布を開けてみると、そこには赤い光沢をおびたガントレット。

「お前の場合、片手しかないからな。防御でどうしても剣が使えな
いときには、それを使えば良い。

まあ、普段はこの剣は使わないようにして今まで通りのバスター
ドソードを使い、ガントレットには上から大き目の布の手袋でもか
ぶせとけ。

貴重なもんだから、盗まれる可能性もあるし、剣の方は俺の家の
家紋まで入っちまつてる。

面倒事に巻き込まれないようにするんだったら、それが最善の策
だ」

ふむふむ、それはぜひ実行させていただけこうかな。

今まで、魔物たちに襲われること計400回以上。

これ以上面倒な事には巻き込まれたくないという心情があるのだ。

「だってな、シロ」

俺はシロの頭をゴシゴシと撫でる。

まあ、いろいろと楽をしたいという考えもあるが、やっぱり旅をしたいと言う事もあるのだ。

「あ、後はシロは連れて行くなよ」

「ええっ!!!? 何故ですかっ!!!?」

シロというアニマルセラピーが無くして俺はどつすれば良いのだ
…っ。

「最初はそれなりに生活が不安定だろうからな、シロの飯分の金を払うのも大変だろう。時間がたちお金もたまり生活が安定したらまた戻って来い。

その時には、連れて行って良いぞ」

「むう」

正論のような・・・正論と認めたくないような・・・。

「まあ、諦める。お前の実力ならすぐにシロを迎えにこれるだろうな」

「はい・・・わかりましたよう・・・」

シロもどこか悲しそうな顔をしていて、可愛い鳴き声で鳴いている。

そして、シロは顔を俺の体に擦り付けてくる。
角が・・・体に・・・イタイ、イタイ・・・。

「じゃあ、頑張れよ」

そんなガイさんの笑顔の言葉。

そして、三日経ち・・・俺は旅に出ることになった。

0話 森での訓練終了（後書き）

ガイさんは本当のチートです。

ガイさんが魔法を使ってないのは、ハンデですね。

誤字・脱字があれば御報告お願いします。

1話 都市

「~~~~」

鼻歌を歌いながら、スイスイと道を進んでいく。

今、俺は森を出て、普通の道を走行している。走行というのは、ちよつとした乗り物に乗ってるわけだ。

俺が乗っているのは鋼の板の底にいくつもの魔力石のはめ込まれたものだ。

鋼の板は、森の中にいたメタルタートルというCランクの魔物の体内で、造られる特別なものだ。

それは特別硬く、材質も良いのだ。まあ、手短にあるものを使つたわけだが……。

はめ込んだ魔力石はただ単純に俺の魔力の消費を少なくするためだ。

まあ、結局どんな風に進んでいるかというと、あれだ。

スノボー（？）、またはスケボー（・）みたいな感じである。

原理はエアホバリングというやつだ。少ない魔力で風を魔力石から勢いよく噴出させているため、地面からは数？高く浮いていて、後ろのほうにある魔力石から風を横に（この場合は後方に向けて）噴出させているので前方に進んでいるわけだ。

足場はシロのために少しばかり広くしていたのだが、ガイさんのせいになんか寂しい事になってしまった。

「空を飛ぶのも良いけど、荷物が落ちそうで怖いなあ〜」

とりあえずは、板の上には荷物が置いてある。

ガイさんには荷物ももらってしまい、更にはお小遣いを少々・・・まあ、俺がモンスターを狩って素材を売り、自分で稼いだ分はガイさんに大半を渡し、少しだけ自分でも持ってきているので、結構な金額を持ってきている。

時々すれ違う商人や冒険者にギョツとした顔で驚かれるが、面倒なので気にしないようにしている。

この乗り物はさつきも言ったとおり、鋼は俺がメタルタートルを狩って手に入れたものだし、魔力石は魔女さんにもらった余りを使っているので、ほぼ俺製なのだ。

まあ、造る時にはガイさんがガントレットを造るように頼んだ鍛冶屋に頼んだんだけどね。

ちなみに、ある事はガイさんに言われた通りにしている。

ガントレットには少し大きめの手袋で隠してあり、いつも使ってるバスターソードを腰にぶら下げ、ガイさんにもらった剣は布で巻かれて背中に斜めに担がれている。

「もう少しで大き目の都市だったかな？」

とりあえずは、大き目の都市に行けば冒険者ギルドがあるので、ギルドに入りたいなあ、と思っっているわけだ。

ギルドランクもS、A、B、C、D、E、F、Gの八つな訳だ。

D～Eランクで、もう一人前と呼べるような実力であり、ガイさんみたいにSランクに分類されるような竜を殺すなんて普通はありえないのだ。

まあ、ガイさんが嘘をついてるとも思えないな。

国では最低でもA～Bランクの人物を10人程度は抱えてるらし

い。俺が今居る国・・・つまりガイさんが騎士として勤めていた国では、最低でも他に二人はAランクを軽がると殺す人物が居るらしい。

ガイさんの話では、ガイさんよりは弱いらしいが・・・。

まあ、俺はAランク相手だと少し辛いだろうね。前に森のBランクのツインタイガーっていう顔と尻尾が二つの魔物と戦った時では、時間がかかったし、少しきつかったからね・・・。

「とりあえずは目指せ王都。その前に少しばかりお金を貯めよう」
口に出す意味は無いが、これが俺の目標である。

まあ、俺の場合は行き当たりばったりなので、これからどうなるかはよく分からない。

「おお、やっと見えてきた」

俺の目線には、周りが高い壁で囲まれている都市。

ここら辺では、魔物の大量発生も多く、防壁はより強固に、そして敵を殲滅しやすいように造られているはずだ。

岩を落とす穴があることはもちろんのこと、噂では相手の後ろに回りこめるように地下道まで掘ってあるらしい。

まあ、あくまで噂だが・・・。

まあ、そんな事を考えているうちにもう入り口だ。
とりあえず、板・・・なんとなくスケボと呼ぼう。
スケボから降りて歩いていく。

「こんにちわ、衛兵さん」

とりあえずは挨拶してみよう。

「おう、少年。この都市には何しに来た？」

衛兵さんはニッコリと笑いながら、お決まりであろう確認をとる。

「とりあえずは冒険者ギルドに入ってお小遣い稼ぎですかね」

「ほほう、その歳で冒険者ギルドに入るとは・・・度胸があるな」

「少しばかり腕には自身がありますよ。まあ、この都市からはすぐに居なくなるとは思いますけどね」

「ん、何故だ？」

俺が居なくなる理由について聞いてくる。

やっぱりこういうのも必要なのだろうか？

「珍しいものを見たいので王都にでも行くのかな、というわけですよ」

「まあ、王都なら珍しいものはたくさん見えるだろう」

ふむふむ、絶対に一つはあるというわけですね。超気になりますな。

「ふむ、それで入場いいですか？」

「ああ、かまわない。うかれて面倒なことを起こすなよ」

「はい」

俺はテキストな返事をする、門をくぐって中に入っていく。
都市では、入場料としてお金を払う所があるのに対して、ここは
十分賑わっているので無料なのだ。

さすがは都市。

人が沢山いるので今までのようにスケボに乗っての移動は危ない
だろう。

「とりあえずギルドか、宿を探すかな」

都市についたらこの二つが目的であるからして……。

1話 都市（後書き）

すぐに王都に向かう予定。

誤字・脱字があれば御報告宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3713v/>

隻腕少年の異世界の冒険

2011年9月19日21時43分発行